

水戸駅前に集結した水戸歩兵第二聯隊(右)と、市民が見送る中、银杏坂を水戸駅に向かう出征兵士(下)(いずれも、昭和7年)、『写真記録茨城20世紀』より転載



戦時下の土浦中学生1 ～満州派遣軍への慰問の文～

1931(昭和6)年の満州事変勃発後、軍部が台頭し、社会がファシズム化・軍国主義化していく中で、その影響がさまざまな面で中学校にも及んできましたが、1937(昭和12)年の日中戦争開始までは、中学生が学業を大幅に犠牲にするようなことはありませんでした。

文中の【 】内は筆者による注記です。

満州事変後の土浦中学

1925(大正14)年から中学校に陸軍の現役将校が配属され、土浦中学でも毎週2時間の教練が必修科目となり、野外教練や兵営宿泊訓練が実施されてきました。1931(昭和6)年9月に満州事変が起こると、時局に関する講演会や映画会も頻繁に開催されるようになりました。加えて、郷土の部隊である水戸歩兵第二聯隊が1932年に上海から満州に転進し、満州での作戦に従軍するようになると、水戸の聯隊から部隊の出征と凱旋とが繰り返し行われ、土浦中学の生徒たちは、その度に土浦駅頭で送迎をしています。また、霞ヶ浦海軍航空隊を訪れる皇族の送迎や本県出身戦死者の遺骨の奉送迎も重要な行事となり、こうした送迎が1933年度には22回を数えています。

満州派遣軍慰問の文

1932年に入ると、生徒たちによる軍隊への献金や満州派遣軍への慰問の文の送付が行われ、3年生(中33回)たちが慰問の文を書き送っています。『進修第35号(1932年4月発刊)』には、生徒22名の慰問の文が掲載されていますが、關辰三郎は次のような文章を書いています。

『萬歳!〇〇君萬歳!』と未だ明け

やらぬ夜空に響く出兵を見送る人々の聲を聞きながら、僕は今感慨無量の思ひで此の筆を取りました。日日の新聞に、或は號外に、或はラジオに聞く滿蒙問題(註1)。錦州事變【1931年10月8日、関東軍の爆撃機12機が遼寧省錦州を爆撃した事件】未だ半なるに上海に暴動【第一次上海事変】と聞く。一難去つて又一難來

るとは此の事かと胸を痛めて居ります。極寒然も零下數十度と。聞くからに身の毛もよだつ満洲の地に、匪賊と各地に轉戦せらる、諸君の勞苦を思ひ、又之がためめ幾多の尊き犠牲者、又は遺族の方々の上を思ふとき、轉々【うたた】同情の涙を禁ずる事が出来ません。日露戦役に満洲に於て幾多の將士が血を流し、骨を曝して獲得した權益により、諸種機關の設備、交通の發達、殊に骨さへ凍る滿洲の曠野を走る南滿洲鐵道(註2)さへ、今や談笑裡に悠々と馳驅し得るも、一に帝國の幾多の努力の結晶として、各國の等しく認める所であります。今や私達も、歴史に地理に東西の文化を學んでゐます。熱心なる先生方の一度此の問題を話さる、ときは、室内寂として聲なく、唯緊張するばかりです。學生の或者は肉親の上を思ひ、或者は切齒扼腕して思ひは遠き滿洲の諸君の上に向つて居ます。私達は奮闘せらる、同胞の努力の萬分の一にも酬ゆる覺悟をして、學生としての本分を守り、勤儉力行を旨として勉學して居ります。どうか我が權益を確保し在留邦人のため滿洲を樂土たらしめたく切望して居ります。

最後につ、がなく權益擁護の大任を完うせられんことを遙に祈つて居ります。』

満州事変は、関東軍参謀の石原完爾を中心として、2年前から周到に準備され起こされた事件でした。関東軍は南滿洲鐵道の線路の一部を自ら爆破し、これを中国側の仕業だとして軍事行動を開始し、滿州【中国東北部。黒竜江省・吉林省・遼寧省から成る】の奉天【現在の瀋陽】をはじめとする満鉄沿線の主要都市

のほか、沿線以外の都市をも一挙に占領しました。しかし、国民は事變の真相を全く知らされておらず、第二次若槻礼次郎内閣は不拡大方針を表明しましたが、世論・マスコミは戦争熱に浮かされたかのように関東軍の行動を支持しました。

日露戦争の後、「日本は日露戦争において20万の犠牲者と20億の金を支出して満州を獲得したのだ。」という言い方がされるようになりました。そして、満州事変が起こされる前後には「20億の資財と20万の生靈【死者の意】によって獲得された満州の權益を守れ!」などの思いが国民の中に生まれていました。こうした思いは學生たちも同様で、土浦中學生たちの慰問の文でも、派遣軍の大義と行動を讃え、その勞苦に感謝の言葉を贈っています。中33回の松島四郎も慰問の文の中で「我が兵士の父兄が【日露戦争において】血と涙で固めた地に、又その弟子が同じ土地に【その權益を守るために】戦つてゐる。何と不思議な事ではないか。氷をまくらにして淋しく眠る兵士。又は戀しき故郷の母よりの手紙を見て一人涙を流してゐる兵士。寒い寒い滿洲の夜の陣營に兵士等は何を夢みつ、あるか。」と述べて、日本の權益のために戦っている兵士たちの勞苦に感謝の念を表しています。

1933年3月、日本は國際連盟を脱退しますが、日本の全権・松岡洋右は「ポーツマス条約で日本がロシアから獲得した權益はこれこれであり、それを中国側が『滿州に関する日清条約』で日本に認めた權益の内容は、これであるから、滿州の權益を巡っては中国側が間違っている、日本側が正しいのだ。」と論じてい

ました。また、日本国民の大多数は「命とお金を懸けて戦った日露戦争。その戦争にやっとのことで勝って締結したポーツマス条約やその後の日露協約(1907年の第一次から1916年の第四次まで)で獲得した満蒙における特殊権益を中華民国の国権回復運動やソ連とアメリカの圧力から死守しなければならぬ。」と思っていました。「満蒙は我が国の生命線である」との認識が広まっていたのです。

満州派遣軍より

満州事変の戦火が上海に飛び火し、1932年1月に第一次上海事変が起きると、水戸第二聯隊は、3月に上海に出動。日本租界地の警備に当たっていました。5月に満州に転進し、関東軍の隷下に入りました。この時に土浦中学からの慰問の文が届き、郷土の部隊である水戸第二聯隊の兵士たちに転送されたようです。10月には聯隊からの感謝状と兵士たちからの返信とが土浦中学に届きました。第二聯隊には本校卒業生も従軍しており、彼らを含めた郷土の兵士たちの返信には、戦線での苦闘や懐かしい母校や故郷への思い、そして中学生たちへの期待と願いとが綴られています(『進修第36号(1932年11月発刊)』には、感謝状の文面と兵士たちからの返信20通とが掲載されています)。

中28回の井坂勇【原籍：新治郡山荘村永井】は9月8日付けの返信で、

「我々も渡満以来至極健全にして軍務に精勵し、護國の重任を双肩に擔ひ生命權確保の爲北滿の曠野の只中淋しき緩化にありて警備の任に當つてをります

から御安心下さい。今は當地も七月以來一ヶ月有餘に亘る大降雨もはれて、旱天續きで内地の酷暑と異り、内地人の想像と異り、朝夕は冷氣を感じられ、十月頃の陽氣にて最早高梁【こうりゃん】も刈とられ、感傷的な秋も訪れ凌ぎよき時節と成りました。當地に於ても今年は稀有の大降雨あり、過日は我々も當地より拾五里北の慶城に糧秣運搬掩護のため連日の大雨を冒して實行し、大洪水、悪路、匪賊と相次ぐ災害と闘ひ、或は川中二千米水深首にも及ぶ濁流の中を背囊装具を全部頭上へのせ、全裸となりて徒渉し、或は全身濡鼠のま、不潔な支那民家に宿泊し、南京蟲と蚊軍の攻撃をうけ、食糧つきて粟と馬鈴薯に生命を繋ぎつ、目的を達成し終生忘却し得ざる辛酸を嘗め尊い経験をえました。斯の如き困苦缺乏に耐へ、皇軍の威力を益々發揮するも一に母校にて陶冶なされし賜と確信致し、今更感謝の念に堪へません。」と戦地での様子を伝えていきます。

現在の進修記念館の地に建てられた「泰安殿」(左)と、旧土浦中学校玄関前の馬車廻しの「蘇鐵」(下)。(昭和16年3月卒・中28回、昭和4年3月卒・中28回のそれぞれの『卒業アルバム』より転載)



一方、中29回の藤田眞之助【原籍：...

稲敷郡阿見村若栗)は、先生方の安否消息を尋ね、母校への想いを次のように綴っています。

「君達の御手紙は九月七日の午後北滿の一都市たる緩化にて手に致しました。見れば土浦中學校とある。

あ、何と懐しい文字であつたらうか。

(略)

今日は何だか餘りの嬉しさに何を書いて良いかわからない。何がさうさせたか？懐しき母校からの便りがあつたからだ。

四五年前の私は君と同じ様に櫻花の徽章を光らせて、眞鍋の坂を上がつたり下がつたりした者である。過去を考へれば萬事夢の様である。

五ヶ年の教程を終つて、世の荒波へと巣立つたのはさまで古くない昭和五年の春三月である。

塚田【校長】先生を始め諸先生の御蔭様にて大した間違もなく、二年間は社會の試練を嘗め、今國家の干城として軍服を纏ふ身となり、男子の本懐たる戰場の人となつたのであります。

(略)

第二九回卒業生の中には、小生以外に、【新治郡】榮村【上境】の酒井眞一(二中队)、【新治郡】中家村【宍塚】の佐野忠之助(九中队)、【筑波郡】小田川邊の野尻嘉之(十中队)の三名も野戦に來て居ります。又吾等の先輩も召集者として多數出征して居る事だらう。

(略)

君達の學び舎前の花壇や、馬車廻しの蘇鐵、泰安殿等も相變らずでせうね。

國道側のからたちの木の間より行人をひやかす様な野蠻な行爲はしないだ

らうね。

最も大切なる中學生だものね。健全な男一匹となつて社會に出て下さいね。

腐敗切つた世の中は是非とも高潔なる人物を必要として居るのです。君達に負はせる社會の期待は寔【まこと】に大なるものがある、所謂龜城男子の意氣を發揮すればよいのである。私は北滿の地より君達の幸福を祈るのみ、では何づれ又。

九月七日

滿洲派遣軍歩兵第二聯隊第十一中队

藤田眞之助

親愛なる諸君へ」

滿州の曠野で過酷な戦闘に明け暮れる兵士たちにとつて、郷里からの便りは何よりのものであつたのでしよう。どの兵士の返信からも國の爲に戦う決意と郷里への凱旋を待ち侘びる気持ちとが伝わってきます。

なお、水戸歩兵第二聯隊は、北滿を転戦後、1934年5月に内地に帰還しました。

(註)滿蒙問題とは、日露戦争後の滿州、内蒙古地方における日本の特殊権益擁護を巡る諸問題のこと。

(註2)南滿州鐵道株式會社は、日本政府により1906(明治39)年6月に鐵道運輸業を営むために半官半民の特殊會社として設立されましたが、同年8月、運輸業の他に、鉱業、殊に撫順と煙台の炭鉱採掘、水運業、電氣業、倉庫業、鐵道付屬地の土地・家屋の経営などを政府から任されることになり、日本軍による滿州經營の中核となっていました。略称は滿鉄。

参考文献

「それでも、日本人は『戦争』を選んだ」

加藤陽子 朝日出版社

「戦争まで」歴史を決めた交渉と日本の失敗」

加藤陽子 朝日出版社

(高21回 松井泰寿)



『進修』第一号表紙(右)と、『アカンサス』の意匠で飾られた旧本館玄関正面三連アーチの柱頭部(上)

Acanthus 第100号発刊を記念して

進修同窓会旧本館活用委員会(旧本館の利活用に関する業務を担当する)では、本紙を毎月発刊(8月を除く年11回)し、本校生徒・教職員に配付するとともに、旧本館公開時の参観者への配布等も行っています。

創刊は、平成20年3月の「新入生歓迎号」で、翌月の第1号に始まり、今回、第100号を迎えました。

これまでの歩みを踏まえ、その成果と今後への期待とについて考えます。
高15回 山田隆士(進修同窓会副会長、元土浦一高校長)

『アカンサス』の創刊

本紙は、平成20年度入学生(高63回)への歓迎の意を込めて、「本校の生い立ち」等について理解を深めていただくべく、平成20年3月に創刊されました。

「新入生諸君に、本校の長い歴史・伝統や旧本館(1905年創建、1976年国重要文化財指定)等に関心をもち、併せて母校への愛着や誇りを感じていただきたい」との想いから、本紙創刊に至ったと伺っています。

第100号までの歩み

裏面「主題」に掲げるように、平成20年4月に本格的にスタートした『アカンサス』は、「生徒諸君に、本校の長い歴史・伝統、そして旧本館への理解を深め、併せて母校愛を持っていただきたい」との、創刊号と同じ想いで、発刊に努めてまいりました。

最初の3年間は、高4回飯田哲也・上木幹夫、高5回飯村弘、高6回片岡博、高14回古徳尚一、そして旧職員小田潤が、旧本館や在校生・卒業生の動向等について述べ、平成23年度(第34号)以降は、飯村弘を中心に、高19回小泉明・竹井茂雄、高21回鴻巣茂・助川博夫・鈴木義人・松井泰寿、高33回久保田高広が、従来の方針を踏襲して、執筆や校閲に携わっており、その間、テーマに窮することも生起するようになり、平成25年5月発刊の第57号以降、「校歌」

の文言に係る内容を取り上げることとして、現在に至っています。

「沃野」・「筑波山」・「関八州」について考察し、次いで、第65号以降は、「霞ヶ浦」についての項になりました。「流海」・「四十八津」・「帆曳き船」に始まり、霞ヶ浦に纏わる歴史、特に海軍航空隊や戦時下の人々の様子、当時の土浦中学生・卒業生の動向等にも触れ、非常時下の人々の営みについての理解を深めてもらいたく、号を重ねて、第100号に至りました。

この間、卒業生の動向については、『進修』(1900年1月の第1号から1943年2月の第46号まで、ほぼ年1回の発刊になる土浦中学校の校友誌)』の記事を基にしましたが、それを裏付けるための作業も精緻を究めました。関連する著書・回想記録・新聞・雑誌等を収集することは勿論、その遺族への聞き取りのための訪問や図書館・博物館での調査、そして、関係地を訪ねる、等の様々な作業を展開してまいりました。かつて特攻隊基地のあった鹿兒島の鹿屋・知覧を訪ねたのも、卒業生・中33回片岡喜作(第84号から第88号まで。特攻隊長として沖縄名護湾で29歳で散華)について語るためでした。

なお、創刊号から第100号までの紙面は、進修同窓会ホームページに掲載してありますので、是非ご覧下さい。

その成果と今後への期待

9年間発刊を続けてきた『アカンサス』ですが、生徒からは、毎月の発刊を楽しみにしているとの声を聞くことが

しばしばであり、旧本館公開日(改修工事のため昨年夏から休止中)に生徒の参観も目立つようになっていました。

また、多くの生徒が、紙面を家庭に持ち帰っていると聞きます。これも母校愛の表れと感じるところです。紙面をご覧になった保護者からの感想等も耳にするところですが。

ただ、「最近では、戦争に係る記事が多い。」とのご意見も頂戴しています。しかし、これは戦争を是とするものではなく、あくまでも、非常時下に生きる人々、特に土浦中学生や卒業生の生き様を知ってもらおうのが狙いです。それは、戦後72年を経た今、当時の生活を体験した人達が僅かになり、いずれ居なくなってしまうからであり、様々な環境の中で、どのように生きるべきかを考える材料を提供していきたいとの想いからなのです。

そうした意味では、先に触れた生徒の動向を見るにつけ、所期の目的は達成できたものと自負しているところです。

「創立以来120年の母校に対しての愛着や誇りを持ち、生徒自身が自己を見つめるとともに、将来に関して真剣に考え、今を精一杯生きる」、そのような生徒であってほしいとの想いから、更に本紙の刊行を続けていってほしいと願っております。

なお、現在の本校においては、かつての『進修』のような、生徒の生の声を伝え残す場が無いことが惜しまれます。今後、そのような場を創る等の工夫が必要とも考えます。

A c a n t h u s 主 題

号	発刊	主 題	号	発刊	主 題
創刊号	20.03	合格通知書327名の諸君に	51	24.11	富山県農学校の見学
1	20.04	土浦分校の初年度経費¥3,889.02	52	24.12	霞ヶ浦舟運
2	20.05	高知や鹿児島からも土中へ	53	25.01	筑波の山のいや高く
3	20.06	運動会・・・ヒョットコ事件	54	25.02	むらさきの筑波山
4	20.07	アカンサスとアカンサスの学舎	55	25.03	筑波線(上)
5	20.09	一高オリンピックと中学校時代の体育的行事	56	25.04	筑波線(下)
6	20.10	修学旅行	57	25.05	校歌「沃野一望」
7	20.11	春の筑波登山と関西修学旅行	58	25.06	校歌に謳われた「沃野」(1)
8	20.12	四つ子のハイカラ講堂	59	25.07	校歌に謳われた「沃野」(2)
9	21.01	旧富山県立農学校本館「巖浄閣」	60	25.09	校歌に謳われた「沃野」(3)
10	21.02	第1回卒業証書授与式	61	25.10	校歌に謳われた「沃野」(4)
11	21.03	教職員4名で開校、さまよえる土浦分校	62	25.11	校歌に謳われた「筑波山」(1)
12	21.04	師弟相親しむ学校生活と進修会の発足	63	25.12	校歌に謳われた「筑波山」(2)
13	21.05	旧制中学校校歌明治40年代に続々誕生	64	26.01	校歌に謳われた「関八州」
14	21.06	半途退学者	65	26.02	霞ヶ浦(その 1)～流海～
15	21.07	発火演習	66	26.03	霞ヶ浦(その 2)～霞ヶ浦四十八津～
16	21.09	天然スレート屋根	67	26.04	霞ヶ浦(その 3)～帆曳き船～
17	21.10	霞ヶ浦を駆け抜けた土中生の青春	68	26.05	霞ヶ浦(その 4)～霞ヶ浦海軍航空隊～
18	21.11	ブラリひょうたん 高田係(中12)	69	26.06	霞ヶ浦(その 5)～霞ヶ浦海軍航空隊と土浦中学生～
19	21.12	強化拡大される軍事教練	70	26.07	霞ヶ浦(その 6)～ノビレ少将と愛犬チチナ～
20	22.01	ブラリひょうたん後篇	71	26.09	霞ヶ浦(その 7)～国際空港 霞ヶ浦飛行場～
21	22.02	旧開智学校、旧制松本高校	72	26.10	霞ヶ浦(その 8)～練習航空隊～
22	22.03	尾崎楠馬と小田原勇	73	26.11	霞ヶ浦(その 9)～戦時下の霞ヶ浦海軍航空隊～
23	22.04	戦後の土浦中学校	74	26.12	霞ヶ浦(その10)～土浦海軍航空隊(予科練)～
24	22.05	軍国主義教育の強化	75	27.01	霞ヶ浦(その11)～予科練の教育と日課～
25	22.06	正岡子規	76	27.02	霞ヶ浦(その12)～予科練の訓練～
26	22.07	分校時代の野球部	77	27.03	霞ヶ浦(その13)～予科練の休日～
27	22.09	土中生の夏休み(鎌倉紀行)	78	27.04	霞ヶ浦(その14)～海軍飛行予備学生～
28	22.10	明治期の通学	79	27.05	霞ヶ浦(その15)～予科練を業立って～
29	22.11	旧制中学から新制高校へ	80	27.06	霞ヶ浦(その16)～空への憧れ、滑空艇～
30	22.12	常名の天神山	81	27.07	霞ヶ浦(その17)～滑空艇から戦いの空へ～
31	23.01	金沢散策	82	27.09	霞ヶ浦(その18)～民宿「秀峰」の親父さん～
32	23.02	Acanthus回顧	83	27.10	霞ヶ浦(その19)～陸軍少年飛行兵；17才の飛行兵長～
33	23.03	明治の土中同窓会、東進会誕生、進修同窓会	84	27.11	振武特別攻撃隊長1～少年飛行生徒から飛行隊員、飛行学校教官～
34	23.04	関東大震災時の土中、東日本大震災の被害	85	27.12	振武特別攻撃隊長2～飛行学校教官から特攻隊長へ～
35	23.05	駒杵勤治	86	28.01	振武特別攻撃隊長3～第81振武特別攻撃隊出陣～
36	23.06	駒杵勤治	87	28.02	振武特別攻撃隊長4～出撃前夜～
37	23.07	駒杵勤治	88	28.03	振武特別攻撃隊長5～突入、戦死～
38	23.09	駒杵勤治	89	28.04	霞ヶ浦(その20)～6月10日阿見空襲1～
39	23.10	富山県農学校	90	28.05	霞ヶ浦(その21)～6月10日阿見空襲2～
40	23.11	明治44年在校生一覧から	91	28.06	陸軍特別大演習と土浦中学生1
41	23.12	明治44年在校生一覧から	92	28.07	陸軍特別大演習と土浦中学生2
42	24.01	明治44年在校生一覧から	93	28.09	陸軍特別大演習と土浦中学生3
43	24.02	結婚式・映画等撮影の利用	94	28.10	陸軍特別大演習と土浦中学生4
44	24.03	結婚式・映画等撮影の利用	95	28.11	徴兵令と学校教練
45	24.04	アンケートから	96	28.12	土浦中学の学校教練1
46	24.05	楠の大木	97	29.01	土浦中学の学校教練2
47	24.06	真鍋台の青春	98	29.02	土浦中学の学校教練3
48	24.07	運動会	99	29.03	土浦中学の学校教練4
49	24.09	水上運動会	100	29.04	戦時下の土浦中学生1～満州派遣軍への慰問の文～
50	24.10	端艇(ボート)の快(楽しさ)			

水戸護国神社での「労働奉仕」風景(いずれも、昭和16年3月卒業アルバムより転載)



戦時下の土浦中学生2 ～総動員・勤労奉仕～

1937(昭和12)年に日中戦争が勃発、政府は翌1938年に国家総動員法、更に、1939年に国民徴用令を制定し、国民生活を全面的な統制の下におきました。戦時体制下においては、一般国民が軍需産業などに動員されるようになり、学校生活も変化を余儀なくされました。

文中の【 】内は筆者による注記です。

国民精神総動員運動

1937(昭和12)年7月7日、日中戦争が勃発すると、軍需産業を筆頭に、産業界全体で多くの要員が求められるようになり、同年9月から「八紘一宇」「天下を一つの家のようにすること。大東亜共栄圏の建設を意味し、日本の海外侵略を正当化するスローガン」として用いられた「一・「挙国一致」・「堅忍持久」の三つのスローガンを掲げて、「国民精神総動員運動」【国家のために自己を犠牲にして尽くす滅私奉公の精神を国民に推奨した運動】を推進し、国民全員を戦争遂行に協力させようとしていきました。この運動は、当然のことながら、学校現場にも導入され、『進修第41号(1938年3月1日発刊)』には、「国民精神総動員運動」についての論説が数編載せられています。中でも、5年生の松浦浩(中37回)は「風雲暗し東亜の空」と題して、次のように述べています。

(略)

世界は動亂期に入つてゐる。我が國も前途には必ず難關が重なり來たる日もくるであらう。故に他國に先んじて、一時も迅速に國家總動員の完成が必要である。

しからば國民精神總動員とは何ぞや。

此は平時に於て國家總動員を樹立して、戦争の時に間諜【まご】つかぬ様にするのは當然な事であると考へられる。しかも年一年と國際情勢の切迫した今日、その準備なくして果して國防の安全が得られようか。要するに國民精神總動員とは一旦緩急のときに國家全體が平時から戦時の情態に一轉して、國民精神を最高に發揚し、戦勝のカップを得るためには、國力全部をあげてどうしても【勝利を得るといふ堅い意氣がそれである。即ち老人も鋤を取り、女子も勿論機械工業に邁進するであらう。小庭にも、又たとへ土地狭小なる所にも必ず耕作物を作るであらう。又指環ばかりか、不用の貴金屬をも溶かすであらう。その他一事一物が皆國防々々の一點に集中する事であらう。

此の意氣、此の精神が國民精神總動員の根底である。

(略)

最後に此の非常時局前に際して、我々の取るべき事は如何といふに、此は自己の本分を盡すといふ點に歸すると思ふ。前に述べた如く武器のみを得て戦ふのが國家に精忠なる所以とは斷じて言へぬ。

明治天皇の御製に

國を思ふ道に二つはなかりけり

軍の庭に立つも立たぬも

といふ様に自己の本分を盡すといふのが自分自身としての精忠なる事であらうと思ふ。」

松浦は、來たるべき総力戦に勝利するために、総動員が必要不可欠であるこ

と、自分たち中学生のそこでのなすべきことを述べ、更に総動員によつて、將來、國民が國から強いらられるであろう生活を的確に予想しています。

日中戦争以後、アジア太平洋戦争の敗戦まで、政府は、國民の戦意昂揚のために、「欲しがりません勝つまでは!」・「贅沢は敵だ!」・「足らぬ足らぬは工夫が足らぬ!」・「聖戦だ己れ殺して国生かせ!」・「進め一億火の玉だ!」・「石油【ガソリン】の一滴、血の一滴!」などの戦時標語を掲げて、女性や子供を含む非戦闘員の國民にまで、耐乏生活を強制していきました。

勤労奉仕

1938年4月、國家總動員法が制定され、政府は、議会の承認なしに戦争遂行に必要な物資や労働力を統制動員できる権限を与えられ、國民生活を全面的な統制の下におきました。更に、翌1939年7月には、國家總動員法に基づく國民徴用令(勅令第451号)が制定されました。この勅令は、重要産業の労働力を確保するために、強制的に一般國民を徴用できる権限を厚生大臣に与えたもので、これにより、國民の經濟生活の自由は完全に失われました。

總動員体制が構築されていく中で、文部省は1938年6月、「集団的勤労作業運動実施ニ関スル件」を通牒しました。これは、中等学校以上の生徒に対して、集団での勤労作業を求めたもので、作業の実施期間は夏季休業の始期終期、その他適当な時期において、中等学校低学年は3日、その他は5日を標準としていました。

更に、翌1939年3月には、集団勤労作業を「漸次恒久化」し、学校の休業時だけでなく、随時これを行ない、正課に準じて取り扱うことを指示しました。作業は、従来、応召兵士の家族に対する援農活動を中心としたものでしたが、その範囲を学校農場・農園、演習林での作業や荒地の開墾などに拡大したばかりでなく、都市防空設備などの公共施設の建設に関する作業や軍用品の製造に関する作業、道路改修や埋め立てなど、土木工事もその対象とされ、多岐に亘ることとなりました。これは、政府が労働力の不足を見越して、在学中の学生・生徒などを労働力の一部として組み込んだ、ということの意味していました。

土浦中学では、その通牒を先取りして、1938年5月31日(火)から6月4日(土)まで、勤労奉仕作業を実施し、作業に参加した5年生の齋藤健吾(中38回)は『進修第42号(1939年3月5日発刊)』に「労力奉仕」と題して、その時の思いを次のように記しています。

「『労働は神聖なり』」

私はこんな言葉の一節を、何度も何度も或は人の口から、或は書物の中から見聞した。併し別段深くは探究せず唯上すべりの意味を取つて首肯して来た。即ち心からは咀嚼し得なかつた。

極最近縣下中等学校のトップを切つて行はれた出征軍人留守宅への農繁期努力奉仕に於て、私はこの言葉を心から知り得た様な気がした。否、本當に知り得たのだ。【華氏】九十度【摂氏】32.2度に垂んとする炎天下に班員を指揮して、

何も出来ない未経験の腕を揮つて、或は桑畑の除草、整地、桑の木伐採作業、或は麥刈りはては難しい養蠶の手傳迄やつたのだ。自分でもよくやれたと思ふ程な荒地の手入、ちくちくする麥刈り、家人に命ぜられたとすれば、快くは承諾しなかつたと思はれる苦しい作業、中學生位に出来るものではないと言はれた仕事を、意志の力忍耐の力、戦時下の超擧國一致、國民精神總動員、出征將士への感謝心、で何なく遂行して世人をアツと言はせたのだ。

此の作業中私は働くことの楽しみ極まりなしと言ふ事を感じた。じつとしてゐられない何とも言へぬ神々しさ、清々しさを感じた。所謂労働の神聖をしみじみと感じた。

他の班員も此の感激を受けたのであらう。眞黒になつて夢中で働いてくれた。私は感謝の心も感得した。又この作業中困難なことをするのは意志の力なる事をも知つた。意志の力は奈翁【ナポレオン】ではないが我々の辞書の中から『不可能』の三字を抹殺して了ふだらう。これからの暑い期間も、眠い時も、この意志の力で勉學に努めよう。この企私に取つては無上の尊い體驗で、この中から汲み取つた心の數々は私をして決して凡人にはして置かないであらう。」



勞力奉仕
(五月二十一日より五日間)

イラスト『進覚之
式宏橋高橋
1938年11月
より』
「勞力奉仕」
(中修第42号)
より

勤労奉仕作業は、「奉仕」とは言いながら、寧ろ、道府県と学校側に自発的に計画を立案させるという、半ば強制的な形で行われました。生徒たちは通学区毎に班を作り、上級生を班長として、指定された農家へ奉仕作業に出かけて行きました。1939年からは、「日の丸貯金が義務付けられ、生徒は毎月10錢以上の貯金をさせられました。また、食事の質素化が叫ばれ、毎週月曜日は、飯の真ん中に梅干しを1個載せただけの日の丸弁当の日となりました。

農作業は、慣れない仕事であり、特に1年生にとつては初めての體驗で、中45回の八木下巽は、『進修第45号(1942年2月15日発刊)』に、「1年次の勤労奉仕での苦勞を次のように書いています。

「【1941・昭和16年】秋の農繁期に僕は【土浦市】小松へ行つた。

(略)

仕事は桑しぼりである。一人が列づ、受持つてしぼる。僕は一番後の方になつてしまつた。上級生は僕等よりずつと速い。桑が大きくて太いのでまとめるのに骨が折れる。やうやくしぼつたかと思ふと藁が切れてしまふ、始はなかなかかどらなかつたがお晝頃からだんだんこつをおぼへて、上級生に左程おくれないうやうになつた。

(略)

今度は小母さんが手傳つてくれる。しぼり方も教へてくれた。とても早い。手で束ねてくると向きをかへて足で桑をおさへてしぼる。しぼらく感心して見てゐた。僕等が二つやる所を五つもやつ

てしまふ。あれでよく疲れないなと思つた。

どうにかして同じ位にやつて見ようと、一生懸命やつた。汗が出て来た。藁が顔へさはつてとてもかゆい。とうとう我慢出来ずわきの方を見ると小母さんが居た。先のやうにしぼつてゐる、早さも變らない。しかも量は僕等の何倍もやつてゐる。仕事といふものはマラソンと同じやうに、いつも同じ早さでやらないと疲れるのが早いと思つた。田で稻を刈つてゐる小父さんもさうだ。そして彼等は休まず撻まず營々と働いてゐるのだ。彼等は働くといふことを一番の楽しみとしてゐるのである。そしてその結果は大事な食糧となり大切な務を果すのである。

元來百姓を卑下する者がある。そういうふ者は米の有難さを知らないと同じである。お百姓さんは國の寶だといつづく思つた。」

1941年2月、文部省は「青少年学徒食糧飼料等増産運動実施要項」において、この運動を「国策ニ協力セシムル実践的教育」であるとし、「一年ヲ通ジ三十日以内ノ日數ハ授業ヲ廢シテ作業に當てること」ができ、その日數・時數は授業をしたものと認めました。これを受けて、土浦中学でも、春の農繁期の勤労奉仕に、秋季のそれをも加え、更に、桜川改修工事、霞ヶ浦海軍航空隊や水戸護國神社での奉仕作業にも従事させるなどして、学びの時間は削られていくことになりました。

戦時下の土浦中学生3 ～出征兵士の奉送迎～

1937(昭和12)年7月に日中戦争が勃発すると、召集を受けて出征する兵士が多くなりました。土浦中学生たちも、その都度、土浦駅や筑波線真鍋駅に向向いて奉送をしています。ところが、戦火の拡大とともに奉送した兵士たちの遺骨をも迎えることにもなりました。文中の【 】内は筆者による注記です。

出征兵士を送る

1年生の清水周宏(中43回)は、土浦駅での奉送の様子を『進修第42号(1939・昭和14年3月5日発刊)』に「出征軍人を送る」と題して記し、死地に赴く兵士たちの胸中を思い遣っています。

「近所の者と一緒には停車場【土浦駅】へ向つた。停車場には雄々しい出征軍人が四人程来て居られた。しばらくすると僕等は停車場前の廣場を集つた。そしていろいろの挨拶がすんで心から僕等は萬歳をとへた。兵士は唯下を向いて涙をぬぐつた。

ホームへ入ると軍歌が天にも轟けとばかりおこつた。兵士は唯下を向いて嬉しさに立つてゐた。列車到着【到着】時刻が次第にせまつて来た。僕等は姿勢を正して君が代を歌つた。その歌の中に汽車はしづしづと流れる様にホームに迂り込んだ。あたりは森閑として物音一つさへ聞えない。兵士は不動の姿勢を取る。そして其の眼にはあつい涙が光つてゐた。

あたりの静けさを破つて汽車の汽笛は高い高い大空に響きわたつた。

『では、立派に行つて参ります。』と元氣には言つたものの、最後の言葉は涙にうるんでゐた。其の兵士の胸の中察するに餘りある。(略)

また、3年赤根勤(中39回)は、東城寺の仁王門前で地元の出征兵士を送っています。

「(略)【日中戦争の勃発によつて】召集令は全國に飛んだ。我が山麓の寒郷山ノ莊村にも。

十七日午前まだ明けきらぬ夜を衝いて出征勇士及び村民は仁王門前に集合

した。仁王門、それは我等にとつて最も懐しい存在であつた。今までに我國運を賭した日清、日露兩役を始め滿洲事變に前上海事變に幾多の勇士を送り、赫々たる武功に輝く凱旋兵を迎へたのであつた。その仁王門が今又今次の事變【日中戦争】に出征する勇士を送るのだ。門頭に交錯された國旗が勇士の心を表す如く翻つてゐる。



東城寺仁王門。右上は仁王門に掲げる「東成寺」の扁額。創建当初の平安時代初頭から寺号は「東成寺」と表記されていましたが、江戸時代に土浦藩主土屋陳直(のぶなお)侯の庇護を受けるようになってからは、土屋侯の「土」を加えて、「東城寺」と表記されるようになりました。

征く者送る者、誰の胸も赤い熱烈なる愛國の念に沸き立つてゐる。村の諸有志の出征兵に送る激励の辭。出征兵士の答辭。

すべてが力強く頼もしい。花火と萬歳三唱。出發。いよいよ別れた。朝日が昇る。

(略) 『進修第41号(1938・昭和13年3月1日発刊)』「出征兵士を送る」

こうした情景が、日常生活の一コマになり、全國津々浦々で見られるようになりました。5年生山口宏三(中38回)は、通学列車の中で見かけた出征兵士の様子を次のように記し、國のために戦う覚悟を固め乍らも、一方では寂しさが募る

兵士の心に共感を寄せています。

「その朝の一番列車は通學生や通勤者で超満員であつた。體の自由は殆んどきかぬ。ふと見ると僕の肩と擦れ違ひに軍装の人が立つてゐる。あたりの雑踏も外に車窓越しに過ぎ去る山川を感慨深げに、じつと眺めてゐる。胸に貼られた布に依つて、その人が出征勇士だと云ふことを知つた。車内の雑音に交つてガタゴトガタゴト車輪の音が響く、唯彼のみ黙然としてゐる。彼は驛頭萬歳の聲に送られて、勇んで乗り込んだのだらう。併し唯一人になつて見ると無闇に故郷の事が懐ひ出されるのだらうか、彼の悲しげな眼は、未だじつと過ぎ去つた後を凝視してゐる。

汽車が次の驛の構内に滑り込んだ時、彼は急にきよときよとし始めた。知人でも居るのだらうか、全く停止して乗客が押し合ひへし合ひ、乗り込んだ時、彼の眼は急に陽氣に、懐しさに耐へられない様な輝きを見せて『やあ!』と大聲でドアの方へ呼び掛けた。あまり意外であつたので、皆ぎよつとして一齊に顔を向けた。相手は青年であつたが、亦『やあ!』と大きく應じて、進み寄つた。周囲は再び静まり返つて居る。何時の間に出たのか、ガタガタガタと云ふ車の音が耳に入る。二人は固く手を握り合つて居た。『おめでたう』『うん有難う、元氣で行つて来るよ。』(略) トーチカを一番乗りしない中は、死んでも歸つて来ないぞ。『さうだとも、俺も此の正月には兵隊さんだ。大いに頑張らうぜ。銃後は此んな大勢の中學生が居るから安心だ。』

此の會話を聞いて僕は嬉しさと、頼もしさと、重大なる責任とを感じた。日本は戦闘に於て必ず勝つ。而して吾等に依



戦場に赴く兵士たちを駅前通りで見送る女学生(左:『ふるさとの思い出 写真集・土浦』より)。同じく、土浦駅ホームで見送る市民(下:『むかしの写真・土浦』より)。



つて銃後戦線にも勝たねばならぬと、堅く堅く決心した。(略) 『進修第42号』(應召兵)

出征する兵士が増えてくると、当然のこと乍ら、生徒たちの友人・知人、肉親・親類も出征するようになり、更に、土浦中学でも出征する先生方が出てきました。1935(昭和10)年には配属将校の藤田正教官、1937年には武道科(剣道)の平塚美治先生など5名の先生方に召集令状が届きました。『進修第39号』及び『進修第41号』誌上には、藤田・平塚両先生に対する生徒たちの送別の辞が載せられています。

遺骨を迎える

日中戦争が始まった1937年以後、出征見送りと並んで戦死者の遺骨奉迎や町村葬への参列が多くなりました。土浦中学生による土浦・真鍋駅頭での送迎は、1937年だけでも21回、1938年には22回、葬儀への参列は1937年に11回、1938年になると20回に及んでいます。

1937年9月28日深夜、海軍二等水兵關勝の遺骨が土浦駅を通過し、校長他7名の先生と同級生とが迎ええました。關は、土浦中学を5年生の6月に中途退学し、横須賀海兵団に入団。教育訓練を受けた後に艦上勤務となり、警備の任務に出航中、日中戦争が勃発しました。關は陸戦隊を志願して、上海戦に参加。9月4日に戦傷を負い、9月10日に戦死しました。弱冠19歳。親友の遺骨を土浦駅で迎えた5年生高木邦次(中37回)は、「駅頭に立ちて、我が親友「關君」の靈を迎へて」(『進修第41号』)と題して、その悲しみと諦めきれない気持ちとを綴っています。

「(略) 列車がすべりこんだ。悲しい列車が……丁度友の遺骨は自分の前に停つた。白木の柩に變つた友の姿、遺族や海軍の方に守られて……自分は唯悄然として立ちすくみ、折からの讀經に一掬の熱涙【一掬の涙いぎの涙両手で掬うほどのたくさんの涙】を流さずには居られなかつた。胸がこみ上げて……そしてひたすら人生の悲哀を感じつゝ、讀經はなほ續く。

僕は心の中で叫んだ。懐しき友、關君よ。人生いつか死有り。その中に君は華々しく戦場の華と散り奉公殉國の榮を負つて遠く逝つたのだ。我等日本人として、男子として、それ程の名譽が又とあらうか。しかし車窓に見える君の姿を見るにつけて、君とすごした楽しい學生時代の事が思ひ出され、なぜに生きて元氣な姿を我々の前に見せて呉れなかつたのか? どうして君がきつ、いた時、運命の神は君の生命をして絶後によみがへらして呉れなかつたのか? 僕は悲しくて悲しくてならない。(略)

あ、我が友關君の靈よ、我れ今感極まつて言ふ所を知らず。ねがはくばこのわびしき我が心中を解せ。然して幸に瞑せよ。(略)

列車は靜かに去つた。そして二度と歸らない關君の靈を乗せて……

僕は唯々感激にむせび泣きつゝ、つめたい宵のペーブメント【石を敷きつめた歩道】を無心で歩いた。」

1937年11月4日には、栗原武之輔(中38回、当時4年生)・章(中41回、当時1年生)兄弟の次兄正巳の戦死公報が届き、それぞれの担任と組長とが弔問に訪れています。その兄の遺骨を迎えた時のことを武之輔は、5年生の時に「兄の遺骨

出迎へ當時を思ひ起して」と題して、『進修第42号』に寄稿しています。

「土浦驛から乗車した僕は、列車が動き出すと直ぐ二等室に入つて行つた。父が白い布で覆はれた柩を、しつかりと抱いて居た。その前にやはり同村の者で、遺骨出迎へに行つた人が、向ひ合つて腰を掛けて居た。僕が入つて行くと、父はちらりと僕を見たきり、再び俯いてしまつた。僕は何となく嚴肅な感に打たれて、

自然と頭が下つた。そして思はず目頭が熱くなつた。僕は兄の白木の柩をじつと見つめて居るのが、たまらなく悲しいやうな氣がして、居た、まらず、その室を出てしまつた。あの優しくして呉れた兄が、今は魂となつてあの柩の中に瞑つて居られるのだ。さう思ふと全く感慨無量だつた。間もなく荒川沖に着いた。在郷軍人、青訓【青年訓練所の人々】及び坊さん達が、驛内に出迎へて居て呉れた。想へば八月十四日同じ此の停車場で、村民の歡呼の聲に送られて出て征つたのだつた。昇降口に立つて打振る手が、何時迄も何時迄も消えなかつた。今でも臉の裏に焼附いてゐる。出征當日兄は蟲齒が腫れて居たので、母が大層心配して薬等入れてやつたのだつた。併し『此位大丈夫だ』と言つて元氣に出征したのでつたが、塘沽上陸以來連戦奮闘する事二箇月餘、遂に【10月12日】元氏【現中華人民共和國河北省石塚莊市元氏県】の華と散つたのだつた。出征する以上戦死は元より覺悟してゐたが、かくも早くそれが現實にならうとは思はなかつた。而もその明闇の世界が、あまりにも幽かである爲か、戦死の報を得ても今迄は信じられなかつた。併し今は遺骨を迎へたのだ。兄は確かに白木の柩に入つて歸つて來

たのだ。僕は行列の後について驛外へ出た。多數の村民及び各種團體が、寂として聲なく頭を垂れてゐられるのを見た時、全く感謝感激の外はなかつた。直ちに遺骨が安置された。そして讀經が始まつた。靜かに立上る線香の煙、鐘の音、讀經の聲、皆一人の哀愁を唆つた。だが君國の爲の犠牲者に對して、何で悲んでならう。泣いてならう。僕は心から祈つた。兄の英靈よ安らかであれと。」

1939(昭和14)年10月中旬には、英語科の田中俊吉先生の訃報【10月13日姫路陸軍病院で戦病死】も届きました。田中先生は1927(昭和2)年3月、東京帝大文学部を卒業、海軍技術研究所、水戸師範学校を経て、1934年8月に本校に赴任しました。先生は、英語の授業のみならず、テニス・柔道も熱心に指導していました。1937年11月召集を受け、郷里の姫路第三九聯隊に入隊しました。姫路の原隊において中隊長代理として兵の教育に当たっていました。翌年5月に中国大陸に渡り、歩兵中尉として活動中に戦傷を負い、姫路の陸軍病院で療養中でした。『進修第43号(1940・昭和15)年3月1日発刊』には「故田中俊吉先生を悼む」の特集が組まれ、英語科の小澤永次郎先生と生徒6名とが、詩文を献じ、先生を偲んでいます。

※アジア太平洋戦争が激しくなると、戦死者の柩には戦地の砂や石が収められたものが多くなつてきました。更に各地で玉碎が相次ぐと、柩さえ届かなくなりました。戦死者310万人のうち240万人が海外で死亡していますが、2011年時点で日本に帰還できた遺骨は127万柱に過ぎません。日本は、兵士の死に場所や死に方を遺族に教えられない国でした。

(加藤陽子「戦争まで」朝日出版社)

(高21回 松井泰寿)

戦時下の土浦中学生4 ～戦時体制の強化～

日中戦争の拡大とそれに伴う国際情勢の緊迫化とにより、戦時動員体制は確立されていきました。総力戦遂行に向け、教育現場では、出征兵士の送迎・戦勝祈願・教育勅語奉読・時局講演・勤労奉仕などを学校行事として行うようになりました。更に、修業年限の短縮や勤労奉仕の期間延長も図られていきました。文中の【 】内は筆者による注記です。

御真影と奉安殿

天皇・皇后の公式の肖像写真である御真影は、宮内省から各学校に下賜【実際は「貸与」だった】され、明治初期から崇拜の対象となりました。したがって、非常に慎重な取り扱いが要求され、校長の責任で厳重に管理され、1920年代からは奉安庫や奉安殿に安置され、四方拝・紀元節・天長節・明治節での儀式の際に掲出されました。

本校には、1910(明治43)年11月1日に下賜されました。幸津國太郎校長が県庁で拝受し、列車で、午後2時17分、土浦駅に到着しました。その際、4・5年生は武装をして、3年生以下は徒手で出迎えました。警察官が先導し、4・5年生は校長の奉戴する御真影の儀仗隊となり、3年生以下は随従の隊形をなして護衛し、真鍋台の校舎まで厳かに行進して、予め設けられていた奉安所に奉じ、職員一同が順次拝しました。奉安所は旧本館玄関左側の部屋【戦後は進路指導室として使われた】に設けられました。天皇が新たに即位するとその御真影が下賜され【前天皇の御真影は奉還した】、校長が県庁で拝受して、全校生徒が同様に奉迎しました。

1928(昭和3)年11月には昭和天皇即位の礼を記念して、現在の進修記念館付近に奉安殿が建設され、生徒や職員は「登下校の際などには、丁寧な敬礼をするように。」と指導されました。

教育勅語奉戴

1930年代に入ると、「教育に関する勅語(教育勅語・1890・明治23年10月30日発布)は、国民教育の精神的支柱として神聖化されるようになりました。「教育勅語」の写しは、殆どの学校で「御真影」と

ともに奉安庫・奉安殿などの特別な場所に安置されるようになり、生徒は「教育勅語」の全文を暗誦させられました。翌1938(昭和12)年に日中戦争が勃発し、翌1938(昭和12)年に国家総動員法が制定・施行されると、その体制を正当化するために利用され、更にその補完のために、1939年には「青少年学徒二賜ハリタル勅語」が發布されました。これを受けて教育現場では、出征兵士の送迎・戦勝祈願・教育勅語奉読・時局講演・勤労奉仕などが、戦時体制下の学校行事として行われるようになりました。

戦時体制の確立

1938年6月、文部省は、中等学校低学年の休業時には3日、その他の学年は5日を標準として、集団勤労作業の実施を通知しました(「集団的勤労作業運動実施二関スル件」)。翌1939年3月には、集団勤労作業を漸次恒久化し、学校の休業時だけでなく随時これを行い、正課に準じて取り扱うことを指示しました。更に1941年2月の「青少年学徒食糧飼料等増産運動実施要項」において、文部省は「一年7月通ジ三十日以内ノ日数ハ授業ヲ廃シ」て作業に充てることができ、その日数・時数は授業を実施したものと認めました。また、同年8月には、「学校報国団ノ体制確立方」の訓令を発し、学校ごとに学校報国隊(団)を組織して、軍事的要請に従って学徒を労務に動員し得る体制の構築を図りました。土浦中学では訓令に先んじて同年5月、生徒会である「進修会」が「土浦中学校進修報国団」に改組され、これまで部であった野球部・水泳部・剣道部などが班となり、新たに設立された滑空班・修練班・研究班などととも、統括組織として設けられた総務部・鍛錬部・国防部・学芸部・生活部のいずれかに属することになりました。

団長には校長が就き、従来の部顧問教師が班長となって、生徒役員は校長が任命するものとなりました。県学務課内には、本部に当たる「茨城県中等学校報国団【団長には県知事が就任した】」が置かれ、中堅皇国民生徒の錬成のための場となり、統後青少年学徒への指導の更なる強化が図られました。

その年の10月には「進修報国隊」も結成されました。これは、いよいよ学徒にも臨戦態勢が求められた結果であり、学校教育全体が「防衛訓練」の名の下に軍隊化していくものでした。校長が隊長で、学校全体が大隊・中隊・小隊に区分され、隊長の命令一下、全生徒が即座に各自の部署に就けるように統制が強化されました。また、学年・学級を超えた通学地域ごとに一隊を構成した実践的な組織も創られ、勤労動員や軍事訓練の基盤となりました。

11月、茨城県は、報国隊の活動に特例を設けました。従来、年間授業カートの日数は30日以内でしたが、30日を超えて軍事訓練や勤労奉仕に充ててもよい旨の通達でした。

この年の12月8日、真珠湾攻撃により太平洋戦争が始まると、土浦中学でも従来の援農作業に加えて、霞ヶ浦海軍航空隊や第一海軍航空廠での軍役奉仕や満蒙開拓幹部訓練所【常磐線内原駅南東約1kmにある日本農業実践学園の農場一帯】での宿泊訓練・防空演習などが行われるようになりました。

中42回(1938・昭和13年4月入学、1943・昭和18年3月卒業)の荒木淳は土浦中学での5年間の生活を回顧して、

「(略) 僕等の生活は文字通り多彩なものであった。【日中戦争から】大東亞戦争に至る迄に第二次歐洲大戰の勃發有り、獨ソ開戦あり或ひは日獨伊三國條約の成立が有り、一方國內的には皇紀



現在の進修学習館付近にあった「奉安殿」(真後ろのヒマラヤ杉は現存する)(中38回『卒業アルバム』昭和14年3月発刊より)と、「茨城県立土浦中学校進修報国隊旗」(『進修』第46号より)



二千六百年の大祝典が有り、僅か五年の中学校生活の中に幾多の歴史的事件に遭遇した。僕等は幾多の國民的喜び、國民的苦しみを経験したと共に一方に於ては過渡期の學生として多くの苦しみ或は樂しみを味つて來た事は否めない。(略)とまれ土中五年間の生活は限りなく樂しかつた。しみじみ思ひ平凡に送つた五年間をつくづくと後悔すると共に今後數年の土中生活を控へられる下級生諸君には何年前車の轍を見られて、樂しい學校生活を有意義に送られん事を望んで止まない。」(『進修第46号(1943・昭和18年2月15日発刊)』と述べ、戦争の波が押し寄せる中、何とか自由と青春を享受できた土中生活に感謝し、後輩にも同様の生活を送つてほしいと願つています。

防空演習

第一次世界大戦後、航空機の性能が飛躍的に向上して空襲の脅威が増大すると、軍・官・民、全てに亘つての防空体制が必要となりました。1928(昭和3)年の大阪での軍・官・民合同の防空演習を皮切りに、既に主要都市では防空演習が行われていました。こうした動きを背景に、防空法の制定が図られました。陸・海・内務その他の省庁の意見が容易に一致せず、1937年に至つて漸く勅令が公布・施行されました。防空法には、空襲による被害を防止・軽減するため、陸・海軍による防空作戦に即応する民間の態勢の整備、即ち、灯火管制、消防・防毒、避難及び救護、監視・警報などを迅速に行わせること、そのために道府県に防空計画を策定させ、態勢を整えさせること、などが定められていました。当初は防空思想の普及や防空訓練が主でしたが、1941年に内容が強化され、更に太平洋戦争の戦局悪化に伴つて、1943年

には、疎開や偽装、非常用物資の配給などに係る条文が加えられました。

防空法に基づいて各地で防空演習が行われましたが、1939年に土浦町で実施された防空演習の模様を2年生の田崎嘉邦(中42回)は『進修第43号(1940年3月1日発刊)』に「防空演習」と題して次のように記しています。

「『東部防衛司令部発表! 午後七時東部防衛司令部全管區に亘り空襲警報が発せられました!』突然ラヂオが鳴り出した。今まで勉強してゐた僕は方々の電燈を消しに歩いた。最後に座敷の電燈を消さうとした時、よい音で聞えてゐる警察の半鐘が鳴り出した。續いて甲高い仲町の半鐘が鳴り出した。勉強室へ戻つて來ると表の方が大部さわつて居る。出て見るともんぺ姿の家庭防火群の人達が集つてゐて、その中に警防團員らしい腕章をつけた消防姿の人が何事か訓示を與へてゐた。僕は自分の家の管制状況を外から一通り調べ、少しも光の洩れてゐないのを見てとつて安心して家の中に入った。中では子供達が『空襲警報々々々々』とさうす暗い部屋の中をあぶなつかしい足取りで駆け廻つてゐた。僕は一人二階にのぼつて、火鉢の側へ仰向きにねころんだ。ちつと耳を澄ますと、階下の子供達のわめき聲や外を叫んでゐるく警防團員の甲高い聲が耳につく。と急に表の人達がざわめき始めた。何か起るなど直感した時、ガンガラガンガラとバケツを敲く音と共に『焼夷彈落下!』と叫ぶ聲が聞えた。がばつとはね起きて窓から表をのぞくと、もう道一杯に焼夷彈が燃えひろがつて真中から眞白い火花の様な火花がシューシューと音を立てながらふき出してゐた。バケツはまた敲かれてゐる。家庭防火群の人達は、水と砂とを上からバサツとぶつけて向ふへ走つて行つた。そして再三、砂をぶ

つけた。さしもの焼夷彈も勇敢な家庭防火群の働で段々と衰へて、仕舞には煙を残して消えていつた。緊張して見てゐた人々は皆口々に何か語りながらこれも段々と立ち去つて行つた。『今の動作は大變良好!』と警察から來た人が大聲で叫んだ。」



防空演習
バケツリレーによる消火作業(右、『写真記録茨城20世紀』より)と全町内が参加して行われる訓練(下、『ふるさと』の想い出写真集・土浦)より。



とドアを開けて通信文を持つて來た。先生がそれを讀まれた。C國の飛行機が仙臺上空を過ぎたと云ふ想定であつた。間もなく遠くの方でガンガンと鳴つた。それから瓦斯だと言ふので防毒面代用の手拭を着けた。先生は大きな手拭をつける時『オツホン』と一つ咳拂ひをしたので、皆がどつと笑つた。暫らくの間沈黙が續いた。突然玄關の鐘が四つ鳴らされた。愈々全校生徒が校庭の隅に避難することになつた。化学實驗室の東側に焼夷彈が落ちて、水泳部員が水や砂をぶつけてゐた。なかなか消えない。『ドガン』と思つたより大きな音がして破裂した。火は益々盛んに燃え擴がる一方である。應援隊が我々避難民中から繰出された。野球部員が走つて來て表門附近に大きな焼夷彈を落されて、御眞影奉安庫は危くなり只今奉遷中である旨を報告した。漸く實戰的になつた。向ふを御眞影を奉遷し通るのに對して、庭球部の者の號令で最敬禮をした。作業室附近には何部の者だか、車やリヤカーを引いて走つてゐた。實驗室前の焼夷彈も漸くプールの水で鎮火した。

翌1940年9月には本校においても初めての防空演習が行われ、3年生の木口公晴(中42回)は、土中生の訓練振りを記しています(『進修第44号(1941年3月1日発刊)』)。

「先週の金曜日に學校内の防空演習を始めてやつて見た。先ず朝禮の時に色々注意を受け、どんな事をやるのだから解らぬので何となく落着かぬ氣持で授業を受けた。短縮【授業】で晝まで何事もなく過ぎてしまつた。放課後清水【繁次郎】先生が大きな眞新しい手拭を持つて來られた。教室で色々話を聞いてゐる中に野球部の者が廊下を走りまはつて何やら怒鳴つた。大勢で一度に言ふので何を言つてゐるのかさつぱり分らない。了る

斯くして防空演習の一日は終つた。土浦町民の訓練はともかく、土中生のそれは真剣味に欠け、ドタバタしたものであつたようです。当時、生徒たちは、空襲などある筈がないと思ひ込んでいました。幸いに土浦は空襲を受けませんでした。幸い、東京をはじめとする全国の主要都市が灰燼に歸したことは周知のとおりです。軍の防空システムは全く機能せず【日本軍のB29撃墜率は、僅かに0.17%だった】、木造家屋中心の日本に對する焼夷彈の雨には、日頃の訓練も役に立たず、それどころか、消火活動や救助活動を行つてゐるうちに逃げ遅れるなどして、犠牲者を増やしてしまいました。(高21回 松井泰寿)

満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所の日輪兵舎(昭和13~14年頃)(下、『写真記録茨城20世紀』より)。満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所之碑(右、元義勇軍訓練所正門跡付近に昭和50年4月に建立された。高さ約7.5m)



戦時下の土浦中学生5～満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所～

水戸市内原町の JR 常磐線内原駅から南東へ約1kmの所に満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所跡地があります。日中戦争から太平洋戦争にかけて、「内原」の名は、満蒙開拓青少年義勇軍とともに全国に知られました。14・15歳から18歳の義勇軍の若者たちは、内原駅から満州へと渡っていきました。

文中の【 】内は筆者による注記です。

満蒙開拓青少年義勇軍

満州(現中国東北部)への移民は、満州国が建国された1932(昭和7)年から、関東軍の主導のもとに始まりました。1936年5月、日本政府は、重要国策の一つとして、「満州農業移民百万戸移住計画」を発表し、戸数10万、人数500万の農業移民入植計画【昭和12年～31年】を打ち立てました。しかし、翌年、日中戦争が勃発したため、軍隊要員として不可欠な成人男子の移民が困難になりました。そこで、政府は、同年11月3日に加藤完治ら6名によって提出された「満蒙開拓青少年義勇軍編成に関する建白書」を踏まえて、14・15歳から18歳までの少年の移民計画に着手しました。

1938年1月、政府は、「片手に鋏、片手に銃」をキャッチフレーズにして、満蒙開拓青少年義勇軍の募集【応募条件は、小学校を卒業し、数え年16歳から19歳までの身体強健なる男子で、父母の承諾を得た者】を始めました。自由応募が原則でしたが、実態は、当局から各道府県【当時、東京は大阪・京都とともに「府」だった。】への割り当てがあり、更に、道府県から各学校への割り当てが決められていました。それに応じ、各高等学校の担当教師により、卒業生に「自主的に応募するように。」との働きかけがなされ、早くも同年4月8日には、義勇軍第1次訓練生の渡満壮行式が内原訓練所で挙行され、義勇軍5,000人が満州に渡りました。

さらに、同年6月、農林・拓務両省による「分村移民計画」が作成され、翌年12月22日には、日満両国政府が「満州開拓基本要綱」を発表し、満州移民事業が「日満両国の一体的重要国策」として位置付けられました。満蒙開拓青少年義勇軍については、日満両国の開拓関係機関で創る

訓練本部を新京に置き、各機関の協議によりこれを運営することとしたため、満蒙開拓青少年義勇軍の重要性が、より一層強調されました。その結果、貧困のため活路を満州に求める農村の青少年たちは、満州で「十町歩地主」になることを夢見て、義勇軍に応募しました。各道府県で選抜された若者たちは、茨城県内原町の満蒙開拓青少年義勇軍訓練所での3ヶ月の基礎訓練と満州国の現地訓練所での3ヶ年の訓練を経て、「義勇隊開拓団」として入植しました。この満蒙開拓青少年義勇軍には、1938年から1945年の敗戦までの8ヶ年の間に、8万6530人の若者が送り出され、満州開拓移民送出事業総体の人員の3割を占めています。

満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所

満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所は、日本国民高等学校【農本主義に基づく、デンマークの国民高等学校をモデルとして、1927年に西茨城郡天戸町(現笠間市平町、常磐線友部駅南東約2km)に農村の中堅人物の養成を目的に創立された。初代校長は加藤完治。1935年に内原に移転され、現在、日本農業実践学園として存続している。】の農場を中心として、日本国民高等学校協会と満州移住協会とによって、1938年2月に設立されました【所長を加藤完治が兼務し、満州側現地訓練所は満州拓殖公社が建設した】。訓練所の敷地は40ha、日輪兵舎が300余棟設けられ、常時数千人の若者が訓練を受けていました。生徒300名を標準として1個中隊が編成され、中隊は5個小隊に分かれ、1個小隊ずつ日輪兵舎で起居を共にしました。毎日の生活は、軍隊と全く同じでラップで起き、ラップで寝る生活で、予科練同様に分刻みの厳しい訓練が行われていました。

1939年には、土浦中学生たちも訓練所を見

学し、5年生藤平貞雄(中39回)は、『進修第43号(1940・昭和15年3月1日発行)』に「内原訓練所見学の記」を寄稿しています。「水戸市の南三里常磐線内原驛より約十五町、日本国民高等学校に隣接する別天地、こゝぞその名も高き、満蒙開拓青少年義勇軍訓練所である。その入口には、カーキ色の制服に戦闘帽姿も凛々しい歩哨が立つてゐる。受付から案内係に付いて行くと、種々様々な建物、大小三百餘棟の日輪兵舎が眼前に展開する。それら無数に点在する日輪兵舎や、一段と高い本部建築から学校の朝禮台の様なもの迄、すべて皮の付いてゐる儘の丸木を半分に割つたもので作つてあり、あたかも山奥の木樵小屋を見るやうである。案内者の話によると此所に在る大部分の建物は凡て生徒の手によつて作られたもので、普通一小隊が入れる日輪兵舎は六十人あれば、一日で作れると言ふことであつた。大食堂など勿論日輪型であるが、凡てが理想的に無駄の無い様に利用されてゐることには本當に驚かされた。又此處へ来る者は、入所當時は、規律正しい厳格な生活に、非常な束縛を感じるさうであるが、約三箇月たつて、いざ此處を離れて満洲に行くことになると、非常な懐しみを感じて離れにくくなることであつた。そして都會の影響を受け、多分に都會の風を吸つた者ほど、満洲の地に行つて、どん底の生活をするには耐えられないと言ふ事であつた。又此處の訓練は、皇國農民精神と、大陸開拓に必要な心身の鍛錬と東洋平和確保の礎たらんとする事を目的として、やつてゐるさうで、その食物も満洲の氣候風土に適した最も簡單で最も栄養に富んだ物を與へてゐるとの事であつた。種々説明を聞いた本部側の教室の様なトーチカ式建物の中には、

訓練本部を新京に置き、各機関の協議によりこれを運営することとしたため、満蒙開拓青少年義勇軍の重要性が、より一層強調されました。その結果、貧困のため活路を満州に求める農村の青少年たちは、満州で「十町歩地主」になることを夢見て、義勇軍に応募しました。各道府県で選抜された若者たちは、茨城県内原町の満蒙開拓青少年義勇軍訓練所での3ヶ月の基礎訓練と満州国の現地訓練所での3ヶ年の訓練を経て、「義勇隊開拓団」として入植しました。この満蒙開拓青少年義勇軍には、1938年から1945年の敗戦までの8ヶ年の間に、8万6530人の若者が送り出され、満州開拓移民送出事業総体の人員の3割を占めています。

入所する者の年齢や職業、病氣の種類、脱逃者の數等いろいろの統計を取ったグラフなどが張つてあつたり、滿洲の地の種々の寫眞等がか、げてあつた。外へ出ると、廣大な平地には、周圍に標的があり、一隅には掩蔽壕、土俵などがあつた。丁度戰闘教練や消防訓練の最中であつたが、皆非常に熱心で元氣溼刺として外から見ても誠に氣持よく感じた。それから軍隊式に規律正しく教育されてゐるには驚かされるので、本部迄案内してくれた者の言葉態度など全く立派なもので、こちらが顔負けするくらゐであつた。方々見學して先づ目に付くことは、建物の簡易粗末よりも、どの兵舎のドアにも皆日の丸が付いてゐる事やその入口に種々の樹木が必ず植ゑてあることである。又各兵舎の周圍には溝が掘つてあり、土がもり上げてある、温度を逃がさぬ爲であらう。そしてその内部には、眞中の柱の周圍に眞新しい水筒がきちんと下つてゐる。壁際には飯盒やトランク、行李、書物等各自の持物や寝具がきちんと整頓されて在る。誰もその上に二階があるとは思つてゐなかつたので、その利用のたくさんには皆少なからず驚かされた様だつた。それから便所も日輪型で、ちやんと消毒して綺麗にしてある。なかなか上手に利用されてゐるもので、こういう型の便所は誰しも生れて始めてあらう。少し行くと各中隊の風呂場、炊事場などがあり、數名の當番生徒が居て、各仕事に従事してゐた。又井戸掘をやつてゐた組があつたが、本職の井戸屋の様に上手であつた。途中仕事の様子を見學したが、砂を運ぶ者、兵舎の修繕大工をやる者、屋根葺をやる者、兵舎内の改造をする者、道路や溝を作る者凡て指揮者も何も彼も一體になつて熱心に働んでゐるのが特に

目に映つた。尚進んで行くと、堆肥製造所、馬場、廣大な畜舎、夜學教室等種々なものが在る。續いて木工室、此處には木造機械類が澤山ある。次は竹細工室、菓細工室、こゝでは仕事に用ふる種々の策【ざる】や籠【かご】等いろいろの必要な品を作ると言ふことであつた。又少し行くと、一つぼつたり菓葺のトーチカ式建物が在る、これは此處で一番最初に建てた日輪兵舎で片見に残して置くのだからだ。その隣には堂々たる佃煮加工場、麴麵製造所、共同焚事場等がある。これは専門家の建てた立派な建物であり、共同炊事場は渡滿前忙しい時等に、此處で一緒に炊事をするのださうだ。續いて味噌醬油の醸造所が在る。これは日輪型の相當大きな建物であつたが、唯、一部分壁を塗つただけで完成してゐなかつた。養魚場を左に見て、尚前進を續けると、生徒が道路工事や松林の芝刈をやつてゐるのが目につく、皆黙々として働いてゐる。大通を横切つて行くと鐵工場が在る、生徒が鋏の焼入れから唐鋏の製造、萬能の修理等迄すべて自分等の手でやつてゐる。これには皆非常に感心した。次は診療所である、粗末な丈の低い建物だが内部は驚くほど立派である。各診療室にはあらゆる器具機械類があり、看護婦が忙しげに働いてゐる。その裏には、より一層近代的裝備がされてゐる新しい立派な建物がある。此處にはレントゲンやその他種々の重要な機械類が在り、今迄の處と別世界の様な感じがする。その隣りには少し離れて日當のよい、綺麗な障子張りの座敷のある建物が在る。中に白衣を着た人が讀書してゐた。此の訓練所では丈夫な者は力一杯働いてゐるが、一旦病氣になつた者は大切に保護されてゐると言ふことである。そしてこれら病人は

電燈も付いてゐて普通の家と少しも變つてゐない、靜かでよい所に病後を養つてゐる。斯くて大體見學も終つたので、本部側の建物へ歸つて麥湯を御馳走になりながら晝食を取つた。歸る途中鋏や『モッコ』を擔ぎ、隊伍正しく歸つて來る作業實習班や、銃を執ひ、きちんと伍を組んで軍歌を歌ひながら、歩武堂々と歸つて來る教練班等に出會つた。此等を見て私は非常に氣持よく感ずると共に、非常に心強い感に打たれた。啾唳たる喇叭の音が響いて來た。集合喇叭だ。……我等はこゝに別れを惜しみつゝ、懷しの訓練所を出た。來る時にはさほど立派な所であるまいと思つて來たのに、歸りにはこれ程心が變るものかと、その心境の大きさに唯々驚かざるを得なかつた。嗚呼想へば今日は有意義な一日であつた。私は蔭ながら聖鋏の使徒に、滿蒙の開拓者に幸多かれと祈つた。」

渡滿

生徒たちは、内原訓練所で3ヶ月の基礎訓練を受けた後に、滿洲の現地訓練所に入所し、電氣もなければ水道もない、ランプでの生活を始めました。自分たちで宿舍を建てなければならなかつた場所もあり、煉瓦造りに失敗した所では、マイナス30〜40℃にもなる冬季には、宿舍の中で凍死する者も出たと言います。食事は自炊で、主食は高粱を大量に炊き込んだ高粱飯、副食はかぼちゃなどでした。冬になって野菜がとれなくなると、「太平洋汁」という名の具なしの塩汁になりました。

各人には小銃と実弾100発とが渡され、農業実習とともに軍事教練も行われました。政府にとつての彼らの位置づけは「兵士予備軍」であり、訓練が終了すると、ソ連との国境近くの開拓地【中国人の耕

作地を日本政府が強権的に安い値段で買上げたもの】が与えられました。彼らは「十町歩地主」を夢見て【政府は「十町歩地主」になれると宣伝していた】、酷寒猛暑を克服し、ひたすら開拓の鋏を振るいつけました。

満洲の現地訓練所入所式（昭和15～16年頃）（下、『滿蒙開拓青少年義勇軍写真集』より）。滿蒙開拓殉職者之碑（右、水戸市内原町の地藏院、義勇軍の遺骨26柱、内原訓練所死亡の9柱、武器池の工事の殉職者2柱の計37柱を合祀しています。高さ約2m）



しかし、藤平の祈りとは裏腹に、義勇軍をはじめとする滿蒙開拓団の人々は、終戦により悲惨な運命を余儀なくされました。敗戦時、滿洲には150万の民間人と50万の關東軍兵士とがいました。侵攻して來たソ連軍によって、シベリアやモンゴルなどに抑留された日本人は63万、うち過酷な環境により死亡した人は6万6400に及びます。この抑留者の死亡を含めて、ソ連の侵攻後に亡くなった人の総数は、24万5400と言われています【義勇軍隊員総数8万6530のうちの死亡者は2万4000であった】。生き残つた人たちは、苛酷な体験を重ねて引き揚げましたが、帰国の術がなかつた多數の人々が、残留孤兒や残留婦人として取り残されました。日本政府は、国策によつて滿洲への移民を勧めながら、1945年5月の時点で、日本軍はソ連国境付近からの撤退を既に開始しており、開拓民は置き去りにされ、国や軍から完全に見捨てられていたのです。

戦時下の土浦中学生6～第2次大戦下の土中43回卒業生～

中43回生は、1939(昭和14)年4月に入学、1944年3月の卒業、と、まさに戦時下での学校生活を余儀なくされました。その中43回の斉藤彰夫氏から、5年間の学校生活を記した玉稿「第2次大戦下の土中43回卒業生」を頂戴しましたので、掲載させていただきます。

文中の【 】内は編集者による注記です。

第2次大戦下の土中43回卒業生

旧制茨城県立土浦中学校第43回卒業生は、昭和14(1939)年4月に入学した。当時は、日支(日中)戦争の真只中。日本は英米とは一触即発の緊張状態が続いていた時で、日本の輸入生命線である西太平洋海域は、米・英・支・蘭の封鎖作戦により、いわゆるABCラインが設けられて、海外輸入航路は閉ざされ、国民の生活は極度に窮迫していた時代であった。

昭和16年12月8日朝、我々3年生の時に太平洋戦争が勃発した。多感な年頃で、次々と大本営から発表されてくる緒戦の戦果に、ルーズベルト(米大統領)はベルトが外れて回転不能になった、などと教室で万歳を三唱し、志気は嫌が上にも高揚していた。

その様な状況の中ではあったが、第43回卒業生は、軍国主義一色の中で、今では想像もつかぬ、5年間の戦時下での中等教育を受け(実質は4年間位の学業か?)、とにかく昭和19(1944)年3月に卒業した。

学校での生活

土浦中学は、明治30(1897)年4月開校の県下有数の進学校であった。1学年のクラスは、甲・乙・丙組の3組で、生徒数は150名。座席は、各教室とも、教壇から遠い最後列から順次成績順に決められた。教科・科目は、戦時中とはいえず、中等教育の基本は守られていたと思う。敵国語である英語関連にしても、特別差別されることは無かった様な気がする。その様な基本科目のほかに、当時特異なものとしては、軍事教練が週2時間あつ

た。そのほか柔道か剣道いずれか選択の武道が週1時間必修としてあつた。

制服の上着は、海軍式の背を丸く縫いあげた詰襟服で、冬は小倉地、夏は霜降り地であつた。編み上げ靴を履き、巻脚絆を巻いて登校した。

校舎は明治37(1904)年竣工のモダンな建築で、後年、国の重要文化財に指定された。教室や廊下の床には油が塗ってあり、靴を履いたまま教室に入ることができた。当時の公立中学校には、正規の教員のほか陸軍からの配属将校がいた。

校門を入って20～30メートルほど先の、校舎正面玄関に向かって左側に、鬱蒼と茂る樹林に囲まれて、天皇陛下のご真影を祀る「奉安殿」がある。登校した教員・生徒らはすべてそこで最敬礼をして教室に入る。四方拝・紀元節・天長節・明治節の四大節の際には、式の始まる前に宗光奎太郎校長と陸軍の配属将校金澤信安中尉が、奉安殿を開けてご真影を捧持し、講堂正面の祭壇に移す。式終了後は再び「奉安殿」に戻す。まさに、「天皇は神聖にして冒すべからず」。

なお、本校生徒は学校の内外を問わず、教員や上級生に遭った時には挙手の敬礼をもって挨拶することになっていた。学校の授業は午前4時間、午後2時間の1日6時間制で、土曜日は午前の授業のみであった。勿論、学校給食などは無い。弁当持参だ。5年次の修学旅行も無い【昭和17年の聖地巡拝旅行を最後に実施されなくなりました】。体育部は戦時下でもあつたし、余り活発ではなかった。そんな中でも水泳部と柔道部、剣道部は県南大会で優勝した。県の柔道大会

には武道科の仲田寛師範に引率されて、小生も水戸の武徳殿での茨城県中等学校柔道選手権大会に出場した。代表選手は、先鋒中山友次郎、中堅小生、大将沼野開禧の3人だ。戦時特例で畳の上ではなく、野外の芝生の上での試合だった。足がスムーズに進まない、ということもあつて、決勝戦で鉾田中学に敗れた。水泳部は平泳ぎの関澤保治、自由形の藤井正巳、小室喜一らが活躍して県大会に出場した。陸上競技部、野球部、庭球部も比較的活発ではあったが、とにかくそんなことをしておられるような環境ではなかった。

我々中学生は、当時、まず海軍の甲種飛行予科練習生か陸軍の特別甲種幹部候補生に志願することを勧められた。どのような経緯か定かでないが、小生は広瀬真君や小野皓三君、原田千之君ら数名の仲間と勤労動員で土浦海軍航空隊適性部に行った。適性課と研究課があり、小生は適性課で主として第14期甲種海軍飛行予科練習生の採用試験に携わった【土浦中学からは、本紙第76号で紹介した戸張礼記氏をはじめ、中45回生約10名が合格・入隊しています】。

田中B式知能検査やクレッペリン精神作業検査の試験官補佐として、試験用紙の配付から試験要領の説明、採点まで任された。器具を使つての適性検査では、協応動作作業検査、速度調整検査、図形再生検査、処置判断検査、操縦演習機検査などの、操縦士としての適性判断の検査、採点に携わった。この時の受験者・第14期甲種飛行予科練習生は、幸いにも戦地には行かず、殆どが復員した。適

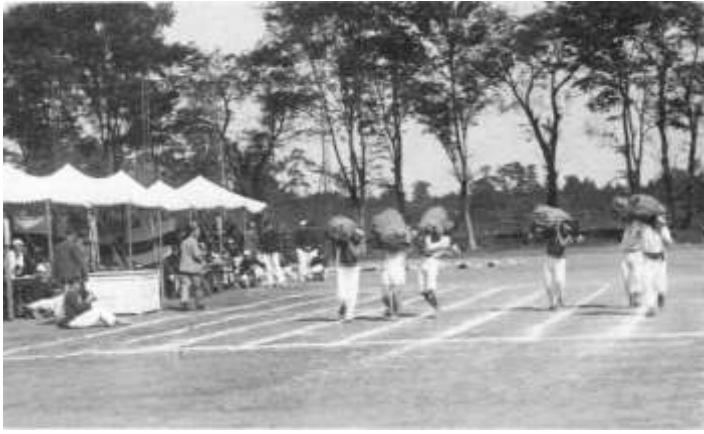


中43回(昭和19年3月卒)5年甲組「柔道部」仲間と(正面玄関前で)

性部の上司は、大学で心理学を専攻した予備学生出身の将校であった。

土中に学中に通常の科目のほか特に課せられた事。

①体力テストⅡ鉄棒での懸垂、砲丸投げ、2千メートル走、米俵を担いで50メートルを走る俵担ぎ走、走幅跳など。それらの総合記録により、初・中・上級の3階級に分けられ、バッジを貰って詰襟に付けていた。



「体育錬成大会」(陸上運動会)における「俵担ぎ走」
(昭和17年3月卒『中41回アルバム』より)

②軍事演習(聯合演習)Ⅱ中学校の各校が完全武装で紅白に分かれての戦闘演習。5年時の2日間、不眠不休で索敵行軍し、早曉敵に遭遇して、「突撃」白兵戦を行うというもの。終わって最後に馬上の現役将校から講評を聞き、それぞれが母校に引き揚げた。小生は軽機関銃手

であったため、その重さで上着の右肩は破れ、皮膚は赤く腫れあがるなど散々であった。

③海洋訓練Ⅱ5年生全員と小澤永次郎担任教師らが、夏休みの1週間、海軍の現役将校・下士官を教官に、千葉県安房郡鋸南町保田海岸の旅館に合宿して、海軍生活の一部を体験するというもので、水兵さん特有の白い作業衣を着て、起床ラッパから一日の訓練を始めた。寢床を片付けて、「兵舎離れ5分前」の号令で兵舎前に整列し、隊伍を組んで海岸に駆け足集合して朝の点呼を受ける。その海岸付近は防諜地域で、一般人は、原則立ち入り・撮影禁止になっていた。遙か海上を駆逐艦などが航行している。多分東北出身であろうか、教官の分隊長曰く「……いつ何時保田の海岸を巡洋艦何隻、駆逐艦何隻通った、云々などと云ったらコレダゾ、コレ。」と、手首を縛られる仕草をしていた。その東北弁のしゃべり方が可笑しくて何時までも我々の語り草となっていた。

点呼が終わると朝食前の日課が始まる。海軍体操・手旗信号訓練・軍歌演習など1時間ほどの訓練で兵舎(旅館)に戻り、待望の朝食を摂る。一日の訓練を終えるのが午後5時。入浴、食事をして、以後自由時間だ。午後9時巡検、消灯で就床。一応軍隊の日課に準拠していた。小生が陸軍に入った時、イ・ロ・ハ・ニの手旗信号は、砲兵初年兵の訓練日課になっていたが、この時は海洋訓練のおかげで余り苦労しなかった。

1週間の訓練を終えて土浦駅に帰っていた時、駅前広場で全員が肩を組んで

円陣を組み、覚え立ての海軍軍歌「如何に強風」四面海なる帝国を」などを高唱して、軍都土浦の人々の喝采を受けて解散した。

④対空監視Ⅱ5年生の時、土浦警察署屋上の夜間対空監視に出された。交替で勤務に就き、「左前方に爆音あり。」とか「鹿島灘の方向に爆撃機らしい敵機数機。」などと、逐一敵機飛来の状況を情報連絡室に報告するというような、単純お粗末な情報伝達業務であったが、当時はこれも御国のためと真面目に勤務した。なお、当時、日本の飛行機は殆ど飛んでなかった。

⑤馬事訓練Ⅱ日本の陸軍は機械化が遅れていた事もあり、明治の建軍時代から兵隊よりも軍馬を大事にしていたようだ。兵隊は1銭5厘(召集令状のハガキ代)だが、馬は100円」とよく云われた。5年生の夏休みに実際に馬を扱う馬事訓練というのがあった。馬体の手入れ・乗馬・歩行練習など、現役騎兵軍人の指導の下で、1週間軍馬の扱い方についての訓練を受けた。最後に馬事教育訓練修了証が交付された。卒業翌年の昭和20年6月10日入営したのが近衛師団野戦重砲隊「輓馬部隊」であった。朝の作業に馬の手入れ・馬房の掃除・寝糞交換が日課としてあったが、中学での馬事訓練が大変役に立った。

戦局の悪化と日常生活

5年生(昭和18年)になると戦局は極度に悪化し、アッツ島守備隊は玉砕全滅し、南方のニューギニアなどでは食料・兵器などの物資の補給も無く孤立無援、マラリヤと飢餓で壊滅した。中34回の

小生の兄・斉藤隆夫も河部隊の歩兵中隊長として北支から転戦し、東部ニューギニア・ソナム島で戦死した。すぐ上の中39回の兄・斉藤英夫は、弓部隊の機関銃中隊小隊長として、ビルマで「インパール作戦」などの大戦に参戦したが、やはり物資の補給は無く、マラリヤと飢餓で壊滅的打撃を受けたと聞く。更に米軍はサイパン島を攻略、フィリピンから沖繩に進攻してきた。

国内では、残った婦女子による国土防衛隊が組織され、連日「撃ちてし止まん。」と竹槍訓練に駆り出された。夜になると黒い布で覆った電灯の下で、細々と芋粥などを啜って飢えを凌いでいた。食料事情は、勿論、極度に逼迫していた。「欲しがりません、勝つまでは。」と、家庭への配給の主食は、少量の、フスマ(小麦糠)入りのコッペパン、サツマイモ、小麦粉が殆どという有様だった。大学・専門学校の学生は、学徒出陣で学業半ば、特攻要員として徴兵された。明治神宮外苑で東条首相出席のもとに行われた、篠突く雨の中を角帽姿で銃を肩に行進する若き学徒の「悲壮な壮行会」は、正視に耐えなかった。その大部分の学徒兵は、特攻隊員として、敵艦に飛行機ごと突っ込み、或いは南方戦線で玉砕し、帰らぬ人となった。その学徒兵が出陣前に書き残した遺書・手記が、戦後、『きけ わだつみのこえ』として出版されたが、涙無しではとても読めない。こんなことが20世紀にはあったのだ、という事を我々には後世に正しく伝えていく責務があるのだろう。(中43回 斉藤彰夫)



1944(昭和19)年4月5日、同窓生の見送りを受け校門を進発し、通年勤労動員先に向かう都立浅草女子商業学校の生徒。
『アサヒグラフ昭和19年5月3日号』より

戦時下の土浦中学生 7 ～学徒勤労動員～

学徒勤労動員又は学徒動員とは、アジア太平洋戦争末期の1943(昭和18)年以降の深刻な労働力不足を補うために、中等学校以上の生徒や学生が軍需産業や食糧生産に動員されたことを言います。1944年からは通年の動員となり、旧制中学校や女学校の殆どの授業が割愛されました。終戦直前の1945年7月の動員数は全国で343万人に上っています。

文中の【 】内は筆者による注記です。

学徒勤労動員・学徒出陣

1941(昭和16)年12月8日、日本はアジア太平洋戦争に突入、戦局の進展とともに、軍に動員される国民が増加し、産業界の労働力は減少する一方となりました。そのため、学徒の労働力が注目されるようになり、1943年3月には、「中学校規程」により、修業年限が5年から4年に短縮されました【1945年3月卒業生から土浦中学では45・46回生が4年修了で繰り上げ卒業となった】。更に同年6月、東条内閣において「学徒戦時動員体制確立要綱」が決定されました。この要綱の狙いは、学徒の戦時動員体制を確立して、「有事即応ノ態勢」に置くこと及び「勤労動員ヲ強化」することでありました。「有事即応ノ態勢」に置くことは、学徒の軍事に関する能力を高め、国土防衛に直接参加させるために学校報国隊の機能を強化し、戦技・特技・防空の訓練の徹底を図ること、女子については、戦時救護の訓練を実施することでした。また、「勤労動員ヲ強化」することによって、食糧増産・国防施設建設・緊急物資生産・輸送力増強が図られ、国民学校高等科・中等学校・女学校以上の生徒や学生を工場や農村に動員できるようにしました。そのため、低学年は農村に、高学年は軍需工場に動員され、学徒たちは、鉛筆やペンや鋏やハンマーに代えて働くことになりました。

戦局の悪化に応じて、政府は、1943年10月、「教育ニ関スル戦時非常措置方策」を立案し、学校の整理統合と修業年限の短縮、戦時勤労動員の強化等の措置を閣議決定しました。これによって、1941年2月以降、30日以内とされてきた勤労動員が、「教育実践ノ一環」として、「在学期間中一年二付概ネ三分ノ一相当期間」に互って実施されることになりました。また10月1日、「在学徴集延期臨時特例(勅令第75号)」が公布されて、理工系と

教員養成系とを除く文科系の高等教育諸学校在学生の徴兵延期措置が撤廃され、20歳以上の文科系学生が在学中中で徴兵され入隊、出征していききました。この第1回学徒兵入隊を前にした1943年10月21日、東京の明治神宮外苑競技場では、文部省学校報国団本部の主催による出陣学徒壮行会が開かれ、東条英機首相・岡部長景文相らの出席の下、関東地方の入隊学生を中心に7万人が集結、行列行進が行われました。

学徒半ばで出陣した学徒兵の数は、全国で20数万人と推定されています。学徒兵は陸海軍部隊に配属され、短期の訓練を受けて、中国大陸や南方戦線、南太平洋等の前線に送られ、多くの戦死者を出しました。この戦没学生たちの手記『きけわだつみのこえ』が戦後1949(昭和24)年に出版され、ベストセラーとなりました。

1943年度、土浦中学では、例年のとおり全学年で、6月17日から23日までの間に4日間、10月26日から11月4日までの間に8日間の農繁期勤労奉仕作業を行いました。

農繁期勤労作業は、地区ごとに班を編成し、5年生が班長となって統率し、班単位で行動しました。朝、決められた場所に集まって指示を受け、6月には麦刈り、ジャガイモ起こし、秋はサツマイモ掘り、稲刈り等の作業を行っています。

2・3月の勤労奉仕【1年生4日間、2・3年生6日間、4年生7日間】は土地改良作業でした。

2・3年生の場合には、土浦・美並・安飾・下大津・藤沢・志土庫・佐谷に行きました。土浦・下大津へは通い、その他へは前日に出発し農家に宿泊しました。この時は、暗渠排水作業を行いました。排水をよくするため、田を胸ぐらいの深さにまで掘り、そこに粗朶【そだ切り取った木の枝】や孟宗竹を入れると

いう重労働でした。仕事が終わると、大きな農家に集まって夕食を頂戴しました。農家の人々は、感謝の気持ちを含めて、精一杯のもてなしをしてくれました。「ひもじい時、腹一杯食べた銀めしの味、これは一生忘れられません。」と、中学46・47回生の卒業30周年記念誌に記されています。

その他、土浦海軍航空隊適性部での造成工事【4・5年生が夏休みに1週間ほど】や土浦海軍航空隊での整地作業【3・4年生が8月1日に】、更には、霞ヶ浦海軍航空隊での草刈作業【全学年で12月26日に】等も実施しています。

動員強化

1944(昭和19)年1月、政府は、激増の見込まれる労務需要に応じるため、「緊急国民勤労動員方策要綱」と「緊急学徒勤労動員方策要綱」とを同時に閣議決定しました。この要綱では、学徒動員を「勤労即教育ノ本旨ニ徹シ」て強化し、「動員期間ハ一年ニ付概ネ四ヶ月ヲ標準トシ且継続シテ」行うこととしました。これは、前年10月に決定した「教育ニ関スル戦時非常措置方策」と内容的には同様のものではしたが、その動員期間が断続するものではなく「継続するものであり、動員の性格が従来の「教育実践ノ一環トシテ」の勤労動員から「勤労即教育」の勤労動員とされた点が違っていました。

土浦中学でも、同年4月から勤労作業が強化されていきました。4・5年生は第1回が4月7日から18日までの間に9日間【4年生は8日間】、海軍病院【現国立病院機構霞ヶ浦医療センター】での防空壕造成や土浦駅での軍用品の積み降ろしに従事し、一部の生徒は荒川沖駅や霞ヶ浦海軍航空隊での作業を行いました。第2回は4月26日から5月2日までの間に5日間でしたが、作業内容は不明です。第3回が5月10日から16日の間に6日間、土浦駅での作業と新川で



土浦中學生が勤労作業に従事した旧海軍病院跡地。現霞ヶ浦医療センター敷地内には、正門（上）や旧海軍を示す「いかり」が刻まれた消火栓（右）など、往時の遺構がいくつか残っている。



の作業とが行われ、第4回は5月29・30・31日の3日間、航空隊での除草作業でした。第5回は5年生のみで6月26日から30日までの5日間、陸軍西筑波飛行場【現つくば市作谷一帯】に宿泊して除草作業に当たりました。7月8日からの通年動員が行われるまでの3ヶ月間の動員日数は、5年生が28日、4年生が21日で、作業はクラス単位或いはクラス内の班単位で行われました。3年生は、第1回が4月20日から24日までの間に4日間で、第一海軍航空廠での貨車からの石炭降ろし、自動車からの降ろし、レール運び作業等でした。第2回は5月4日から9日までの6日間で、第3回が5月17日から27日までの間に6日間、ともに内容は不明です。第4回が8月22日から25日までの4日間、霞ヶ浦造船所、海軍病院、中川ヒューム管、丸通会社、土浦駅、赤池作業場等での作業。第5回が10月25日から11月2日までの間に7日間、秋季勤労奉仕作業でサツマイモ掘り。作業終了後にサツマイモ持参で通年動員中の4・5年生を慰問。第6回が1月8日から19日までの間に11日間、作業場所は第4回と同じ。合計38日の勤労奉仕でした【作業内容については、不明なものが多い。】

1・2年生は、例年のとおり、6月20日から30日の間に8日間、10月25日から11月2日までの間に【日数は不明】農繁期援農作業を行い、その他、8月22日から26日までの間に4日間、霞ヶ浦海軍航空隊で作業を行いました。1944年度、勤労奉仕作業に多く動員されたのは3年生以上でしたが、多くはクラス単位の行動で、教員が引率・巡回・作業監督を行いました。1回の作業は4日から10日ほどで、それが終わると、1週間くらいは登校して授業を受け、それからまた勤労奉仕作業を行うといった日程でした。4・5年生は同一行動を取る機会が多くありましたが、3年生の作業と重ならないように、日程が調整されていました。こうして学生の本分たる学びの時間は益々少なくなっていきましたが、生徒たちは一言の不満も漏らさず、お国のため、銃後の務めとして総力を挙げて作業に取り組んでいました。

1944年2月、戦局はいよいよ不利になり、政府は、同月25日、閣議において「決戦非常措置要綱」を決定し、国民生活の各分野に亘って当面の非常措置を定めました。これによって前月の閣議決定は根本的に修正され、中等学校程度以上の生徒は、「今後一年、常時之ヲ勤勞其ノ他非常勤務ニ出動セシメ得ル組織体制ニ置キ、必要ニ応ジ」動員することになりました。3月、「決戦非常措置要綱」に基づく学徒動員実施要綱^①が出され、動員の基準が明らかにされました。この中に、

- (1) 学徒の通年動員
 - (2) 学校の程度・種類による学徒の計画の適正配置
 - (3) 教職員の率先指導と教職員による勤労管理
- 等が強調され、文部省はこの決定に基づいて詳細な学校別動員基準を作成し、3月末に全国に指令しました。これを受けて全国の学徒は、4月半ばから、通い慣れた校舎から続々と軍需工場へ動員されていきました。4月、文部省は「学徒勤労動員実施要領ニ関スル件」を指令しました。これは、作業場を「行学一体ノ道場」^②たらしめ、学徒の「奉公精神、教養規律ニヨリ、作業場ヲ純真且明朗ナラシムルコト」を要請し、教職員の「率先垂範陣頭指揮」を強調したものでした。更に5月、文部省は、「勤務時間中軍事教育、教授訓育等ノタメ一週六時間ヲ原則トスル時間ヲ設ク」べきことを指示しました。しかし、7月9日にはサイパン島が陥落する等、アメリカ軍による反攻は熾烈を極め、我が国の劣勢、特に航空戦力の絶対的不足が明らかになってきました。そこで、政府は、7月11日、「航空機緊急増産ニ関スル非常措置ノ件」を決定し、学徒動員の強化をそのための一措置として決定しました。これに基づいて文部省は同月、「学徒勤勞ノ徹底強化ニ関スル件」^③を通牒し、
- (1) 1週6時間の教育訓練時間の停止
 - (2) 国民学校高等科児童の継続動員
 - (3) 供給不足の場合の中等学校低学年生徒の動員
 - (4) 深夜業を中等学校3年生以上の女子生徒にも課すること
 - (5) 出動後2ヶ月経たない学徒にも深夜業を課すること
- 等を指令しました。
- 8月、「学徒勤勞令」が「女子挺身勤勞令」^④と同日に公布され、学徒動員の法的に強化され、11月には夜間学校の学徒や病弱のため動員から除外されていた学徒の動員までもが指令されました。また12月には、中等学校卒業予定者の勤勞動員継続の措置が決まり、翌年3月卒業後も引き続き学徒勤勞動員を継

① 1944年2月25日閣議決定。② 1944年2月25日閣議決定。③ 1944年7月11日閣議決定。④ 1944年8月11日閣議決定。

⑤ 1944年8月11日閣議決定。⑥ 1944年8月11日閣議決定。

⑦ 1944年8月11日閣議決定。⑧ 1944年8月11日閣議決定。

⑨ 1944年8月11日閣議決定。⑩ 1944年8月11日閣議決定。

⑪ 1944年8月11日閣議決定。⑫ 1944年8月11日閣議決定。

⑬ 1944年8月11日閣議決定。⑭ 1944年8月11日閣議決定。

⑮ 1944年8月11日閣議決定。⑯ 1944年8月11日閣議決定。

⑰ 1944年8月11日閣議決定。⑱ 1944年8月11日閣議決定。

⑲ 1944年8月11日閣議決定。⑳ 1944年8月11日閣議決定。

㉑ 1944年8月11日閣議決定。㉒ 1944年8月11日閣議決定。

㉓ 1944年8月11日閣議決定。㉔ 1944年8月11日閣議決定。

㉕ 1944年8月11日閣議決定。㉖ 1944年8月11日閣議決定。

㉗ 1944年8月11日閣議決定。㉘ 1944年8月11日閣議決定。

㉙ 1944年8月11日閣議決定。㉚ 1944年8月11日閣議決定。

㉛ 1944年8月11日閣議決定。㉜ 1944年8月11日閣議決定。

㉝ 1944年8月11日閣議決定。㉞ 1944年8月11日閣議決定。

㉟ 1944年8月11日閣議決定。㊱ 1944年8月11日閣議決定。

㊲ 1944年8月11日閣議決定。㊳ 1944年8月11日閣議決定。

㊴ 1944年8月11日閣議決定。㊵ 1944年8月11日閣議決定。

㊶ 1944年8月11日閣議決定。㊷ 1944年8月11日閣議決定。

㊸ 1944年8月11日閣議決定。㊹ 1944年8月11日閣議決定。

㊺ 1944年8月11日閣議決定。㊻ 1944年8月11日閣議決定。

㊼ 1944年8月11日閣議決定。㊽ 1944年8月11日閣議決定。

㊾ 1944年8月11日閣議決定。㊿ 1944年8月11日閣議決定。

戦時下の土浦中学生 8 ～土浦中学の通年動員～

戦局がいよいよ不利となった1944(昭和19)年2月、「決戦非常措置要綱」が閣議決定され、これによって中等学校程度以上の学徒を「今後一年、常時之ヲ勤勞其ノ他非常勤務ニ出勤セシメ得ル」とし、ついに通年動員が実施されることになりました。文中の【 】内は筆者による注記です。

通年動員

1944年2月の「決戦非常措置要綱」に続き、政府は3月に「決戦非常措置要綱ニ基ク学徒動員実施要綱」を決定し、動員の基準を明らかにしました。文部省は、この決定に基づいて詳細な学校別動員基準を作成し、3月末に各学校に通達しました。

土浦中学でも、通年動員の計画が具体的に進められ、6月18日には宗光太一郎校長の「通年動員に関する訓話」が行われました。4年生(中45回)の勤務先は第一海軍航空廠に決定したので、宗光校長は5年生(中44回)の動員先工場決定のための視察を始めました。26日には牛久の興亜精機製作所、28日には中高津の東京電機製造株式会社【主として軍船舶用モーター製造】と中村航空兵器株式会社【機関銃の弾丸製造。1945年10月3日に社名を株式会社中村鉄工所に変更】を視察し、学校から近い東京電機と中村航空兵器を動員先に決定しました。また土浦国民学校高等科1・2年の男子生徒は第一海軍航空廠に、女子生徒は富士崎町の森島工場【鋳物製造】に動員となりました。

7月4日、5年生が両社を見学し、8日には4・5年生の動員壮行式が催されました。式終了後、4・5年生全員が真鍋の八坂神社に参拝して、5年甲・乙組は東京電機へ、丙・丁組は中村航空兵器へ、4年生全員は第一海軍航空廠へ向かいました。11日には航空廠で4年生の入所式が挙行され、学校からは校長と学年主任とが参列しました。

東京電機に動員となった5年生佐藤菊四郎(中44回)は、動員先での生活を『土浦市史』(昭和50年11月刊)に、「あの頃……思い出すままに」と題して、次

のように記しています。

「勝ちいくさのはずだった戦況が日増しに不利になって、昭和十九年私達が中学五年生になった年、いよいよ戦局の重大化によって、通年動員を命ぜられ、一学期末の七月、中高津の東京電機の工場で働くことになった。

そこでは電動発電機や工業用ミシンモーターを生産していた。私達十余名は旋盤部に配置された。その当時は班長と呼ぶ熟練工数名のもとに、各十何名かの工員や学徒がいて、数班に分かれていた。最初の日は、工員の作業を旋盤のわきに立って、みているだけでへとへとに疲れてしまい、立ち仕事のつらさが身にしてみた。しかし次の日からは早速ハンドルを廻して、バイト【旋盤に用いる金属などを切削する工具】の動かし方を教わり、鋳物の荒挽【あらびき】等をはじめた。

最初のうちは、お手伝い的な感じであったが、私達に仕事の指導をしてくれた二、三年上の工員たちが次々と軍隊に入隊し、やがて数名の工員と私達中学生たちが、旋盤部の中心になってしまった。旋盤部は生産の隘路だとのこと、間もなく二時間残業がはじまり、十九年の秋ごろからは夜勤もはじまった。一週間交代だった。夜勤の週末になると顔色が悪くなるような気がした。しかし、夜勤では工場内の数坪の小さな釜屋で夜食が出た。イモ、大根、麦、うどん、ねぎ等を大きな釜でとろとろに煮た雑炊だった。うすい塩味だけのドンプリ一杯だけだった。箸を使わなくてもフーフー吹きながらすすめるようなものだったが、熱い雑炊がうまかった。しかし、少しおくられて行ったり、警報のサイレンで暗い『防空電球』も消されて、ちろちろ燃える残り火で食べる時には、人数だけあるはずのどんぶりが足りなくなったり

もした。

九月十八日には十七才以上兵役編入【法改正により、それまでは20歳だったものが、1943年に19歳へ、1944年に17歳へ、と切り下げられた。】ということになり、秋の一日『徴兵検査』と『点呼』を兼ねて今の土浦第一中学校【当時は土浦国民学校西校舎】に集められ、在郷軍人として命を預けた私達は、軍籍に入ったのである。当時私達も国防服を着、左の襟には体力検定章のマーク、右の胸ポケットの上にはカットのような白布の小片に、又左の胸のポケットの上には血液型や、名前を書いた白布を縫いつけた。封筒に遺髪と爪を切って入れておけ、爆撃で吹っ飛んでもよいように、指先にも名前を書いておけ、と言われたのもそのころだった。

それでも十九年の夏には、裏の庭で工場の盆踊が催され、夕方仕事を終えた工員さん達が女工員さんの浴衣を借りたり、また化粧などして陽気に踊るのをちよつと羨しく思ったりした。

しかし、年が過ぎて昭和二十年になってからは、ほとんど連日昼夜空襲警報で、二月十六日には海上の機動部隊から発進した艦載機が、警報が鳴る前に上空に現われるしまつで、敵機を見ながら壕にかけこむこともあった。……(略)……「また同じく中44回の小倉昭一は、『思い出すままに』として、次の手記を認【した】めています。

「吾々に動員命令が下った時は、何とも複雑な気持ちだった。上級学校を目指して勉強中の吾々には、今後の不安と一方国家への忠誠心が入りみだれていた。いよいよクラス毎に半分は中村鉄工所へ、半分は東京電機へと配属されて、労働提供を強制されることになった。吾々東京電機組は、青春と学業を省み



中44回・卒業記念写真(『中44回卒業50周年同窓会』アルバムより)西の空を一晚中まっ赤に染めた東京大空襲のあった夜が明けた10日、動員先の工場での夜勤を終えた中44回生は学校に集まり、卒業式に臨んだ。宗光校長の訓示を聞き、決戦の覚悟を新たに「海ゆかば」を斉唱、射撃場でこの記念写真を撮って解散した。



中高津二丁目(現土浦四中前)にあった東京電機製造株式会社土浦工場。(昭和50年つくば市桜三丁目に移転した。)
(上、『むかしの写真・土浦』より)
昭和19年4月5日、国防服姿も凛々しく、工場に向かう東京都立第三商業学校(現東京都立第三商業高校)生(右)。『アサヒグラフ』昭和19年5月3日発行より



る暇もなく、朝から夕方まで軍用の船舶用モーターの部品作りや、その組立てに精を出した。中学生ということで多少寛大な扱いが、なされたんだろが初めての経験なのできびしい毎日であった。油を使った仕事のため、今まできれいな皮膚をしていた両手も、すじだらけになり、その間に油の汚れがしみ込んで、全く労働者風の手に変った。中でも鋳物工場に配属された友達はいくら洗っても首すじまで黒くなり、何か全身が鋳物の粉で汚れたような色をしていった。しかし、仕事がいやだと思つたことはないから不思議である。私は生来汗かきのせいもあって、真夏など煮えたぎった油のそばで仕事をするので、タオル一本では間に合わない程、汗をかいたことを思い出す。工場には吾々同様動員された、昭和女学校の女生徒もいた。卒業のため工場を去るときは、やはり一抹の淋しさを覚えたが、今でも工場の傍を通ると昔を思い感無量である。」「(『土浦市史』より引用)

中村航空兵器に動員された横田尚義(中44回、本校第21代校長)は、「……零戦等の戦闘機の機銃の弾丸作りを行った。旋盤を使って弾丸をくりぬく仕事であった。そのうち夜勤も交代で行われるようになった。夜勤の時は夜の8時頃から翌朝の5時、6時頃まで徹夜で働いた。夜食が出たが、カボチャやジャガイモにご飯がついている程度であった。たまに、大けがをする者もあったが、不満の声は全く聞かれなかった。同年齢の土浦高女の生徒達も通年動員され、同じ工場内で働いていた。」と、当時の作業の厳しさを語っています。(『進修百年』より引用)

3年生(中46回・47回(注))は、はじめ中川ヒューム管、霞ヶ浦造船所等に勤労働員となりましたが、1945(昭和20)年1月30日からは通年動員となり、第一海軍航空廠に入廠しました。当初は横須賀海軍工廠の予定でしたが、遠隔の地での勤務を心配した宗光校長が軍や所轄官庁と交渉した結果、地元の第一海軍航空廠に変更になりました。うち1クラスは機械工場に配属になり、7月初め、その工場が福原(現笠間市)へ疎開したため、生徒たちも移動しました。

更に2年生(中48回・高1回)も通年動員となり、3月3日に壮行式が挙行され、7日から第一海軍航空廠や霞ヶ浦海軍航空隊で働くことになりました。航空隊では本物の飛行機の掩蔽工作や給油作業、更に偽装工作【本物に似せて木製のモデルを作り、滑走路付近に並べておき爆撃させる。】も行いました。しかし空襲の激化に伴う軍関係機関の分散化により、一部のクラス【甲組】が学校に戻され、教室で飛行機エンジンの分解組立を教わっています。

これを受けて、新築中であつた新講堂【旧体育館】を工場とすべく改築工事が6月26日から始まりましたが、終戦により中止となりました【終戦後、新講堂の新築工事は1946年5月に再開され、翌年11月に創立50周年記念式典に併せて落成式が挙行された。その半世紀後、100周年記念事業として進修記念館と学習館に建て替えられた】。

動員下の卒業式

1945(昭和20)年3月10日には動員中の5年生と4年生【繰り上げ卒業】の合同卒業式が挙行されました。卒業生たちは、動員先から登校し、卒業式に臨みました。中44回佐藤菊四郎は次のように記しています。

「あの三月九日は夜勤だった。一晩中警報が開放しで、やがて【東京大空襲のために】西の空が夕やけのように、まっかに明るくなった。その赤い空に一段と明るく、輝く火の玉が、みるみる大きく、明るくなると、急にいくつかの火の玉に分かれて落ちていった。それがB29だったか、味方機であつたか判らない。しかし、そのころは迎えうつ戦闘機もほとんどなく、わずかに高射砲が応戦したようだった。

こうして仕事もできないまま夜があけた。三月十日は私達土浦中学四十四回生と、一年短縮で、四年制になった四五回生との合同卒業式だった。

油で汚れた手を粘土で洗い、学校に行き本土決戦を誓い、『海ゆかば』を歌って式を閉じたあと、射撃場で記念写真をとって解散した。」「(『土浦市史』より引用)

しかし、1944年12月に閣議決定された「新規中等学校卒業生ノ勤労働員継続ニ関スル措置要綱」によって、卒業生たち

は、中等学校に新たに設けられた付設課程に進学させられ、動員はそのまま継続となりました。また上級学校進学者や軍関係学校入学者に対しても、入学を3ヶ月間延期する措置が採られたので、彼らも6月23日及び27日に、東京電機・中村航空兵器・第一海軍航空廠での勤務を免除されるまで、工場勤務を続けました。6月14日には新2年生(中49回)の動員も決まり、18日、345名が第一海軍航空廠に入廠、7月9日からは新1年生【併設1回】も通年動員となり、援農作業に従事する一方、校庭の開墾も始まりました。

終戦、帰校

8月15日、登校した一部の生徒と職員は終戦を告げる玉音放送を拝聴、その後、宗光校長の訓話がありました。8月20日には2年生以上で第一海軍航空廠に出勤していた生徒の退廠式が行われ、翌21日に全校生徒が登校、中庭で集会が持たれました。動員中幸いにも本校生徒に死傷者は出ませんでした。全校生徒1405名(9月25日現在)は、敗戦による虚脱感に陥り、落ち着いた学園生活に戻るまでにはかなりの時間を要しました。

(注) 中46回・47回：いずれも1942年入学。1943年の「中学校規程」(中学校の修業年限を4年に短縮)により、1944年3月に4年修了で卒業した生徒が46回、1947年3月に5年で卒業した生徒が47回卒業となった。同窓会等は、合同で開催しているとのことである。
参考文献
「学制百年史・戦時教育体制の進行」
文部科学省

「進修百年」土浦一高
※次号から、中45回生の通年動員(第一海軍航空廠)について、掲載します。
(高21回 松井泰寿)



昭和17年当時の第一海軍航空廠庁舎と職員。庁舎は、現在の陸上自衛隊霞ヶ浦駐屯地・関東補給処の地にあった。

戦時下の土浦中学生 9 ～第一海軍航空廠の歴史～ (霞ヶ浦その21)

A B C D 包囲網の中、米・英との戦争に備えて、航空機量産の必要性が叫ばれるようになると、1941(昭和16)年10月1日に第一海軍航空廠(一空廠)が開庁され、総務部・補給部・飛行機部・発動機部・兵器部・会計部・医務部・工具養成所から成る海軍航空戦力の重要な修理・生産拠点が阿見原に誕生しました。

文中の【 】内は筆者による注記です。

海軍技術研究所航空研究部

阿見町に海軍の施設が置かれたのは、1921(大正10)年に霞ヶ浦飛行場【陸上機用。現在の茨城大学農学部・東京医科大学病院・阿見町役場・阿見第二小学校・阿見中学校・陸上自衛隊霞ヶ浦駐屯地一帯】と水上機基地【現陸上自衛隊武器学校】とが建設され、臨時海軍航空術講習部が設置されたのが最初でした。英国からセンピル大佐以下30名の教官を招き、飛行機搭乗員【後の海軍航空兵の指導教官】の訓練が行われ、翌1922年には霞ヶ浦海軍航空隊が開隊され、陸上機・水上機・艦上機等の航空要員の訓練が始まりました。

それより先、1918年には東京築地に、海軍の艦船・航空機・兵器を開発するための海軍技術研究所が設立されましたが、1923年の関東大震災で壊滅してしまいました。そのため、海軍技術研究所は目黒に移転され、そのうちの航空機部門は霞ヶ浦に移され、1925年に海軍技術研究所航空研究部が設けられました。航空研究部は、飛行機・飛行船・発動機等の性能・構造・材料等に関する総合実験研究機関として、海軍航空技術進展の一翼を担っていました。航空研究部は、現在の陸上自衛隊霞ヶ浦駐屯地内の高射隊施設付近にあつて、霞ヶ浦海軍航空隊からの支援を受けて、飛行テストも行っていました。1926年には横須賀海軍軍需部霞ヶ浦支部も設置され、阿見原は、大正末期には既に、海軍航空の訓練・研究・補給の一大拠点となっていました。

須賀に発足すると、霞ヶ浦の海軍技術研究所航空研究部は海軍航空廠に統合されました。この海軍航空廠は、1940年4月5日に「海軍航空技術廠【空技廠】と略称された。】と改称され、航空廠から継続して、航空兵器の設計・性能実験、航空兵器及びその材料の研究等、諸種の技術的試験を行っていました。航空廠・空技廠の施設・設備は、列強各国と比較しても遜色なく、大風洞や大水槽、材料試験場等、これほどの規模のものは日本にしかありませんでした。当時、勤務していた技術者たちは何れも俊英揃いで、1945年以降の公職追放により、国鉄(現JR)や民間企業に転じた後も、各方面で活躍し、産業界の復興・隆盛に尽力しました。特に、新幹線の開発、自動車産業・電子産業の発展に果たした彼らの役割には大きなものがありました。

海軍航空廠

1941(昭和16)年、米・英との戦争に備えて、海軍では、航空機の大規模な修理・補給施設を建設することになり、新たな海軍航空廠令(勅令第875号・1941年9月25日公布)により同年10月1日、海軍航空廠が開設されました。この海軍航空廠は、先述の航空廠とは異なるもので、国内外の海軍航空隊基地の近くにあつて、航空機に関する資材の製造・修理・購買・保管・供給を迅速に行い、第一線に送り出すためにできた海軍の専用工場で、国内には、霞ヶ浦に第一、木更津に第二(支廠は大湊)、広島に第一(支廠は舞鶴)、大村に第二(支廠は鹿屋・朝鮮領海)、台湾高雄に第六一海軍航空廠が設けられました。

既に、1939年10月15日に公布された特設航空廠令により、中国漢口・海南島海口に特設航空廠【被弾機のエンジンや機体の修理等の野戦修理工場】が設置され、その後、戦線の拡大とともに南方各地【シンガポール・スラバヤ・パラオ・サイパン・ラバウル等】に設けられていきました。

第一海軍航空廠(一空廠)

1939(昭和14)年11月17日、海軍航空廠(翌年4月5日、海軍航空技術廠と改称)の霞ヶ浦修理工場が開設され、翌年2月1日には同出張所となり、1941年10月1日、勅令第875号により第一海軍航空廠(一空廠)が開庁されました。その2ヶ月後の真珠湾攻撃により、日米開戦の幕は切つて落とされたのです。

一空廠は、横須賀鎮守府に所属し、総務部・補給部・飛行機部・発動機部・兵器部・会計部・医務部及び工具養成所から構成されていました。その主要業務は、航空兵器及びその材料の修造・購買・準備・保管・供給に関するものでしたが、戦争の激化に伴って損壊機の修理が増加していきました。1941年以降は、新型の航空機を製造し前線に送り出すことも行われるようになりました。

一空廠の位置は、現在の土浦市右衞門から阿見町の西部で、その中心部は陸上自衛隊霞ヶ浦駐屯地・関東補給処の地であり、工具養成所は、土浦市烏山四丁目一帯に設けられていました。建物の面積は18,000㎡、一空廠の総面積は89,000㎡にも及んでいます。

工場の建物は、当時としては極めて珍しい鉄骨組立で、工場の大扉も鉄骨に鉄張りでした。航空廠の周囲には秘密保全のために、一部がコンクリート製の万年堀が建てられていました。敷地内は全面舗装され、排水溝にもコンクリート製の頑丈な物が使われていました。また飛行

機移動の障害にならないように、電線は、電話線・ボイラー管とともに全て集約して、地下に埋設されました。

主な工場は、「大型機体修理工場」・「解体工場」・「発動機試運転場」・「小型機械修理工場」・「板金工場」・「製図工場」・「機械分解手入場」・「木工プロペラ工場」・「熱処理工場」・「利材工場」で、その他に、飛行場に隣接して格納庫が設けられていました。そのため、当時の航空機全機種についての修理及び補給が可能で、一部機種については製造もできました。これらの施設の動力源として、関東配電株式会社（現東京電力）の変電所が第三門（現陸上自衛隊霞ヶ浦駐屯地裏門）付近に設置されました。架線をその変電所まで引き込み、更に地下マンホールを通して、各施設まで送電しました。常磐線荒川沖駅からは海軍専用線が既に引かれ、霞ヶ浦海軍航空隊への燃料・資材輸送路として活用されていましたが、一空廠の建設に伴い、資材運搬と整備済み飛行機の搬出のために、一空廠内にも引き込み線が敷設され、その引き込み線は現在の右籾小学校の校庭付近にまで延伸されていました。

一空廠は、軍人と一般工員とで構成されており、1944年初めから1945年8月15日までは、23,000名から24,000名が在籍していました。軍人は将校・下士官のみで一般兵は勤務していません。工員は以前から一空廠に所属していた工員と徴用工【ちようようこう】強制的に動員された工員。徴用とは、戦争中などに政府が国民や占領地住民を強制的に動員して、兵役を含まない一般業務に就かせること【】、それに勤労動員された学徒・女子挺身隊員とが加わっていました。

廠長や部長級の官舎は中高津【現在の

土浦保健所付近】に、課長等の佐官級の官舎は桜ヶ丘にありました。尉官及び下士官は、桜ヶ丘や航空廠内の官舎に、或いは航空廠近辺の借家・下宿に居住していました。独自の将校は、寮監を兼ねて、徴用工・女子挺身隊・女子工員等の寮等に起居していました。工員たちの住宅や寄宿舎は、一空廠近くの右籾から緑が丘・小松ヶ丘・小松一帯に建てられており、現在の土浦日大高校の敷地には徴用工用の第五寄宿舎がありました。また烏山には養成所生徒用の寄宿舎もありました。

一空廠の一日は朝7時の出勤から始まります。何しろ2万人余の人たちが一斉に出勤するので、一空廠に通じる道は、自転車と徒歩の人波で埋まっていたと言われるほどでした。出勤時刻をタイムカードに記録した工員たちは、職場ごとに朝礼を行い、朝礼後、冬でも上半身裸で体操をし、終了後「点呼」、「作業、掛かれ。」の号令で業務を開始しました。勤務規程は工員も兵隊と全く同じであり、勤務規律は艦隊勤務同様に厳しいもので、仕事をサボって他の場所まで油を売ることが出来ませんでした。

工場と工場との間は駆け足、団体の移動では整列徒步行進、上級者に出会えば「歩調、取れ。頭、右（中・左）。」の敬礼も欠かせませんでした。廠内では秘密保全が徹底されており、記念写真も設立当初のものが数枚残っているだけで、工場内部や工場を背景にしたものは全くありません。

朝7時から午後4時30分までが通常の勤務時間でしたが、戦局の逼迫とともに、6時30分までの残業、更に8時30分までの残業、4時間程度の残業は当たり前のこととなり、1944年頃からは、残業

6時間が普通という厳しい勤務状態になりました。

更に、工員の忠告【おしやう 呼び出しに不応すること。特に、召集令状を受け軍務に就くため指定地に赴くこと】による労働力不足を補うために、1944年8月に公布された「女子挺身勤労令（勅令第519号・1944年8月23日公布）」により、14歳から40歳までの未婚女性が軍需工場等に動員され、一空廠にも配属されてきました。また、中等学校以上の生徒や学生にも1943年以降、勤労動員が始まり、1944年4月からは通年動員となつて、軍需工場や航空廠に毎日出勤することになりました。一空廠には、土浦中学・麻生中学（現麻生高校）・土浦高等女学校（現土浦二高）・土浦女子商の3・4・5年生が動員されており、各学校からの動員数は、土浦中学485名、麻生中学166名、土浦高女756名、土浦女子商50名でした。彼らは、自宅通勤と寄宿舎からの通勤とに分かれていましたが、出退勤時刻は同じでした。

1944年7月、サイパン島陥落後、米軍による本土空襲が本格化し、海軍では空襲被害の拡大を防ぐため、軍事施設の疎開を始めました。一空廠の疎開は1944年より本格的に実施され、遠くは筑波山麓・加波山麓、近くは乙戸・西根・小岩田・実穀・本郷・吉原等の山林・谷地を利用して、小規模な工場が造られ、多数の女子挺身隊員や動員学徒が特攻兵器の製造に携わっていました。

一空廠に対する最初の空襲は、1945年2月16・17日の2日間に亘って行われました。艦載機による銃撃と爆撃とが続き、大型機体修理工場の北側の屋根の鉄骨はアメのように曲がり、倉庫前のコンクリート広場には大穴が空き、工場の大扉は機銃弾と爆弾の破片で蜂の巣のようになりました。「一式陸攻」や「桜花」も焼失し、廠内で10名が戦死しました。その後もしばしば空襲を受け、7月10日には、右籾の林の中で3名の女子挺身隊員が機銃掃射を受け、彼女たちは抱き合つて戦死していました。

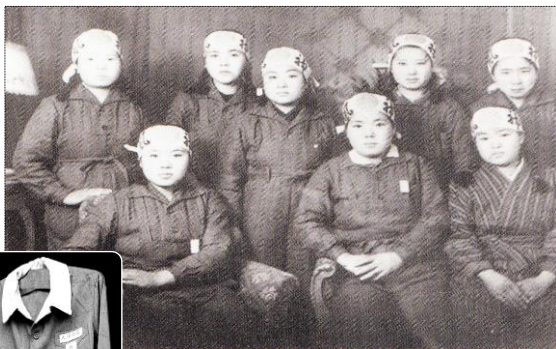
1945年8月15日に終戦を迎え、一空廠は同年11月1日、他の海軍各庁とともに廃止されました。一空廠の工場や施設は連合国の管理下に置かれ、運搬できる機械類は全て接収されました。しかし建物の大半はそのまま残され、1953（昭和28）年頃から当初の姿のまま陸上自衛隊に引き継がれました。しかし1991（平成3）年、新しい建物の建築と旧施設の取り壊しが始まり、1998年までには一空廠の施設は全てが姿を消しました。

※参考文献

「櫻水物語」屋口正一（中48・高1回）

「阿見と予科練」阿見町

（高21回 松井泰寿）



女子挺身隊（石下町、昭和19～20年）（上）『写真記録茨城20世紀』より。土浦女子商の動員学徒が着用した制服。桑の樹皮の繊維で織られ、白の綿布の襟当ては首筋の擦過防止のためのもの（左）（美浦村「民俗資料館古里」蔵）。



八坂神社境内にある第一海軍航空廠殉職者の「忠霊碑」(左)。霞ヶ浦第一海軍航空廠から特設航空廠等に派遣され、戦死された工員等69柱の慰霊の碑が1944(昭和19)年6月に航空廠内(第九工員宿舍付近)に建立された。題字は連合艦隊司令長官・海軍大将豊田副武。裏面に69柱の氏名が記されている。戦後住宅地の拡張に伴い、土浦市真鍋の現在地に移設された。

一空廠工員宿舍の払い下げを受け、現在地に移築された「阿見中学校旧校舎」(下)。



戦時下の土浦中学生10

～第一海軍航空廠勤務～(霞ヶ浦その22)

1944(昭和19)年初めから1945年8月15日までの間、第一海軍航空廠(一空廠)には軍人・工員・学徒・女子挺身隊員など、最大で2万4千名の人々が働いていました。今回は、一空廠に終戦まで勤務されていた長谷川芳三氏と田中蔵吉氏とのお二人に、高5回飯村と高21回松井・鴻巣がお話を伺いました。文中の【 】内は筆者による注記です。

第三工場木工班組長

長谷川芳三氏は、1915(大正4)年、岩手県紫波郡の生まれ。家業は建具屋で、丁稚奉公に出されていましたが、日中戦争が始まった1937(昭和12)年に上京、知人の伝【つて】で群馬県の中島飛行機製作所太田工場に入りました。中島飛行機は、当時、世界でも屈指の技術力を持っている航空機専門のトップメーカーで、「隼」や「零戦」といった陸海軍の飛行機の殆どを作っていました。

「結婚を機に家内の母親が住んでいた土浦へ移り、しばらくのんびりしていましたが、1940年10月、徴用工【ちようよう】戦時などに国家が国民を強制的に動員して、兵役以外の業務に就かせること」として第一海軍航空廠(一空廠)へ引っ張り出されました。一空廠が、開戦に備えて、阿見に開庁される直前で、とにかく工員が必要だったので。私は、中島での経験と技術を持っていたので、徴用されたのだと思います。

一空廠では、最初、工員養成所で鋳物の木型作りの訓練を受けました。それから飛行機部へ回されましたが、直ぐに横須賀の海軍工廠への出張命令を受けました。私を含めて3人が、横須賀へ研修のために出向しました。私が一番の新人工員で、あとは伍長格の人と組長格の人です。しかし、私は中島で実際に戦闘機の組立てを一通り経験していましたが、研修の内容はよく分かっていたので、横須賀でも半年間、鋳物の型作りの研修を受けました。もちろん飛行機の部品を作るための型です。一空廠に戻り、さっそく飛行機の部品作りをさせられました。

太平洋戦争が始まると、一空廠も戦時態勢となり、日曜日も第1・3しか休めませんでした。7時から勤務ですので、小松ヶ丘の工員住宅を自転車車で6時頃出ました。4時30分の定時に仕事が終わることはなく、毎日のように4時間の残業があり、弁当を2つ持って家を出ました。現在の自衛隊の関東補給処の敷地全部が工場でした。飛行機部・発動機部・兵器部・会計部・工員養成所というように各部に分かれており、私たちがいた飛行機部の木工関係の部署は、第三工場に属していました。私の職場には私より古株の人が何名もおりましたが、飛行機に関しての経験は私が一番ありましたので、先輩を差し置いて組長をさせられました。兄玉という大尉さんが「お前は組長になっても先輩がたくさんいるのだから、あまり威張るのではないよ。」と仰ったのを覚えています。

1943年以降、戦局が厳しくなってくると、工場からも召集されて出征する人が出てきました。誰を出すかは組長が決めたのですが、割り当てですから出さないうけにはいきません。出征すれば生きて帰れる保障は全くないわけで、出征する人を選ぶのはたいへん辛い業務でした。工員が召集されれば当然人手が足りなくなり、それを補うために、養成所の生徒を繰り上げ卒業させたり、少年工も訓練を受けて職場へ配属されて来ました。少年工は小学校を卒業した位の年齢であったと思います。中学校や高等女学校の学徒も動員されて来ましたが、人手は足らなくなってきましたが、原料についての不足はあまり感じられませんでした。軍には最重点で物資が回さ

れていたのだと思います。原材料以外の物品についても同じようにありました。物品については会計部が管理していましたが、組長には命令権【請求権】がありましたので、用紙に必要な物品名を書いて、班長と係官の印鑑を貰って、会計部に持って行けば物品は自由に手に入りました。

勤労働員では、近隣の中学校・高等女学校の生徒さんたちがやって来ました。私の所には台湾からの学徒も来ていました。大学生は徴兵され、兵隊になって来ました。技術士官として赴任していたと思います。1年経つと少尉に任官しました。

空襲は1944年から始まりました。土浦の町は、幸い空襲を受けませんでした。一空廠は何回も艦載機の空襲を受けました。私の部署でも、第七宿舍にいた作田という少年工が空襲で亡くなりました。避難した防空壕から倒れている姿が見えるのですが、空襲警報が鳴っているために、遺体を取りに行けません。空襲警報が解除になって、やっと遺体を収容し、広場に薪を積んで茶毘に付した時には、夏の盛りだったので遺体はだいぶ傷んでおりました。その日は大房方面でも被害があつて、7名位亡くなったそうです。作田君の遺骨を骨箱に入れて、親元へ届けました。空間の在であったと思います。親御さんは「ご苦労さまです。」と丁寧に迎えてくださって、ご馳走までしてくれましたが、お国のために死んだとは言え、今考えてみると、親御さんはどんなにか辛かったことかと思えます。」

工員

つくば市在住の田中蔵吉氏は、1929(昭和4)年生まれ。1944年3月、土浦尋常小学校高等科を卒業、同年4月に第一海軍航空廠工員養成所に第3期生として入所しました。

「実家の和菓子屋(清月堂)では、統制で砂糖などの原材料が入手できなくなり、休業状態でした。父・兄・姉の3人が航空廠に勤めており、養成所は航空機の修理工を養成する所だと言うので、早く手に職を付けようと工員養成所を希望しました。採用試験を経て入所した同期生たちは65名、関東近県から来ていました。工員養成所は現在の烏山四丁目一帯にあり、生徒は全員、養成所に隣接する寄宿舎(寮)から通学していました。所長は現役の海軍大佐で、海軍航空技術廠の出身者や一般嘱託教員・熟練工員が教育・指導に当たっていました。

工員養成所での日課は、5時起床、清掃、朝食を済ませ、7時登校、朝礼の後、8時から授業が始まり、午前3時間・午後4時間の時間割でした。食事は3食とも寮で摂りましたが、食糧難の時代、麦飯と味噌汁・沢庵漬け程度で、とても満足できるようなものではありません。1班(クラス)50名位で、座学と実習とが1週間交代で組まれていました。座学には航空力学・物理・化学・生物・数学・国語・修身などの科目があり、旧制中学や専門学校で教えていた先生方が、嘱託教員として教壇に立っていました。実習では、一空廠の熟練工員が教官として指導に当たりました。授業が終わると寮に戻り、入浴・清掃を済ませ、夕食。夕食後2時間程の自習をして9時に就寝と

なりました。先輩が寮長を務めており、行動が遅いと不始末を起こすと罰直(バツター)を食らうなど、予科練生と同じような生活を送っていました。1944年6月頃から勤労働員が始まり、土浦中学・麻生中学・土浦高等女学校・土浦女子商の3・4・5年生が、一空廠で働くようになりまし

た。中学生たちは寄宿舎に入れられて、私たちの寮の前を通過して一空廠に通勤していました。小学校で1級上の先輩もいました。『勉強がしたくて中学校に進学した人たちが、勉強ができなくなり、勉強はあまりしたくなかった自分たちが勉強をさせられている』という皮肉な結果に複雑な思いでした。身分は生徒でしたが、給料が出ました。日給65銭で、制服と作業服とは支給されました。食事代に1日50銭差し引かれましたので、月にすると4円程の給料でした。休日は2週に1回、午前8時から午後4時までの外出が許されました。小桜町(現桜町四丁目)の実家に帰り、映画を見に行く位しかすることがありません。しかし、家が遠方で帰れなかった仲間たちは、さぞ寂しかったことだろうと思います。

工員さんたちが徴兵されて【兄の豊吉氏も召集され、中国に出征していた。】、工員が不足したため、1945年3月、修業年限3年の予定が1年で繰り上げ卒業とされ、一空廠第一工場飛行機部に配属になりました。小桜町の実家を6時に出て、土浦駅から荒川沖駅まで常磐線の汽車に乗り、そこから歩いて一空廠まで通いました。7時授業開始、午後4時30分終了、6時30分までの残業、その後、更に8時30分まで残業、合計4時間の残業は当たり前になりました。日給は1

円30銭、残業代も含めて月50円位になりました。

新日鐵住金鹿島製鉄所にて展示されている「桜花」とその複製品(下)と、新日鐵住金鹿島製鉄所にて展示されている「桜花」の複製品(左)。



一空廠では、民間の自動車工場などで働いていた熟練工の方が、班長や組長として、若い工員を統轄して作業に当たっていました。第一工場の飛行機部では、特攻機『桜花』の部品も作っていました。重要な部品は土浦四中付近にあった中村航空兵器株式会社【戦後、中村鉄工所と社名を変更した。】などの民間工場で作成し、航空廠で組み立てていました。秘密保持のため、製造工程ごとの連絡はなく、自分たちが作っている部品がどのように使われるのかは全くわかりません。『桜花』の完成品を見たのも1回だけでした。『桜花』は、胴体こそジュラルミン製ですが、翼は木製で、要するに、爆弾にロケットエンジンと翼とを付けた特攻兵器でした。その命中精度を高めるために、グライダー方式【ロケットエンジンの燃焼時間は約30秒しかない。】により、搭乗員が操縦できるようにした

もので、100%生還の見込みのない兵器【人間爆弾】でした。乗って行く人のことを思うと、何ともやりきれない思いでした。

上の方の人たちも、これではとても勝ち目はないと思っていたのでしようか、工場ではあまり煩いことは言いませんでした。1945年になると、年配の軍人さんたちが工員として配属されて来ていました。皆さん農家の出身でしたので、機械のことは全く分からず、ぶらぶらしていました。私たちも、『仕事は私たちがやりますから。』とっていました。

1945年以降、一空廠は艦載機のグラマンF6FやF4Uコルセアなどの空襲をたびたび受けるようになりました。空襲警報が鳴ると、防空壕に退避します。当番が防空壕の外で見張りに立つのですが、学徒出身の若い技術士官の方は、『危ないから防空壕に入っておれ。』と言ってくれました。艦載機による銃撃と小型爆弾の投下で、大型機体修理工場の屋根が吹き飛び、屋根の鉄骨はアメのように曲がってしまいました。飛行機部の工場は、爆弾が落ちたかと思いましたが、燃料は、爆弾が落ちたかと思いましたが、燃料切れで霞ヶ浦航空隊の飛行場に着陸しようとしたところを狙われたようです。同期生も何名か戦死しましたが、廠内には2万名以上の人が働いており、また厳重な報道管制が敷かれていたため、詳しいことはよく分かりません。茶毘に付されて、それぞれの故郷に帰って行ったようです。」

参考文献

「阿見と予科練くそして人々のものがたり」阿見町「茨城県の戦争遺跡」伊藤純郎編

戦時下の土浦中学生 1

～第一海軍航空廠・学徒たちの戦い1～ (霞ヶ浦その23)

第一海軍航空廠(一空廠)に通年動員となった学徒は、土浦中学 44・45・46・47・48・49 回生の外、麻生中学(現麻生高校)・土浦高等女学校(現土浦二高)・土浦女子商の生徒たちでした。今回から、『戦後五十年 卒業五十周年 第一海軍航空廠動員学徒の集い記念誌『戦いのなかの青春』(茨城県立土浦中学校(中45回)・土浦高等女学校 動員学徒の集い実行委員会)(1995・平成7年8月15日刊)、『櫻水物語 戦中派の中学時代(中48回・高1回 屋口正一)(1987・昭和62年5月27日刊)』をもとに、学徒たちの戦いを綴っていきます。
文中の【 】内は筆者による注記です。



工員からタガネ作業の指導を受ける都立第三商業生
『アサヒグラフ』1944・昭和19年5月3日号より

土浦中学45回生

動員学徒の集い実行委員会委員長であり、『戦いのなかの青春』編集委員会委員長でもあった渡邊光夫(中45回)は、土浦中学入学から一空廠入廠までの学校生活を次のように綴っています。

「昭和16年4月桜花爛漫の真鍋台の土浦中学校に紅顔の美少年相集う。その数212名。そしてこの年12月8日には大東亜戦争が勃発し我々は聖戦完遂の名のもとに、農繁期には出征兵士の家の農作業の手伝いに駆り出されていた。そして18年4月には岩瀬繁君が仙台、桜井元君が名古屋の陸軍幼年学校へ入学したが、まだ国内は戦勝ムードにあった。然し、この年の厳寒には全員が出島村【現かすみがうら市】の農家に分宿し、昼は米増産のための土地改良作業に従事するなど勉学もままならぬ状態であったが、日本の勝利を信じて頑張っていた。19年に入ると戦いも厳しさが加わり憂国の念やみがたくなり、軍隊への入隊希望者が続出した。その先陣を切ったのが4月1日陸軍特別幹部候補生として入隊した越川弘君、海軍甲種飛行予科練習生第14期前期生として入隊した篠山文夫、鈴木重男、中山福男の諸君であった。そして6月2日には小生の君原小学校時代からの親友戸張禮記君【本紙第76号に掲載している】が第14期後期生として入隊したのであった。

かくして7月には既に閣議決定されていた『学徒戦時体制確立要綱』に基づき土浦中学・土浦高女・麻生中学の4年在学生全員が阿見町にあった第一海軍航空廠に動員されたのである。(後略)『進修同窓会東京支部会報『東進』第13号・1999(平成11)年4月1日発行]

入廠

1944(昭和19)年7月11日(火)10時から、土浦中学4年生(中45回)と土浦高等女学校4年生との入廠式が、学校長・学年主任の臨席のもとに挙行され、第4代廠長和住篤太郎中将の式辞の後、学徒代表の長南武夫が宣誓を行いました。

12日(水)からは、養成班において、「軍機保護法」・「服務綱領」・「工場規則」・「計測器具」・「航空機一般」・「作業に用いる器具類」・「発動機」などの講義(座学)と基礎作業の実習とが行われました。女学生と一緒に部屋で講義を受けることもありましたが、これは、男女共学ではなかった土中生にとっては、まさに青天の霹靂、嬉しいような、恥ずかしいような、こそばゆい気持ちで、技術士官の話などは上の空であった生徒も居たようです。実習は、「タガネ」・「ヤスリ」・「キサゲ」から始まりました。

「タガネ(鑿)」は、鉄板を切断する作業で、それぞれの万力に一人ずつ付き、厚さ5mm程の鉄片を銜えさせ、ハンマーを大きく振り下ろして力一杯鑿を叩きます。力を入れないと鑿の刃先は鉄片に食い込まず切れません。頭を打ち損なうと鑿を握った指を打ったり掠ったりして、皮が剥け血が噴き出します。指導員が吹くピーツという笛に合わせて、ハンマーを振り上げてはガチャンと打ちます。この繰り返しで、鑿は少しずつ鉄片に切り込んでいきます。

「ヤスリ(鑿掛け)」は、簡単なようではなかなかに力と技の要る仕事でした。長時間の反復練習で、血豆ができる程絞られました。

「キサゲ」は、彫刻刀の兄貴のようなもので、金属面を削り、100分の1mmまで擦り合わせるといふものです。削った面に朱肉のような塗料を塗って、紙に写すと

高い所だけが染まりますから、そこを更に削ります。様に平らになれば高低無しに全体に色が着く筈ですが、とても難しく、何度も反復練習をさせられました。養成班での基礎訓練は10日程続き、24日(月)からは教育班に移りました。適性検査によって、旋盤などの機械工作組と銅工・仕上げなどの手作業組とに分けられ、28日(金)午前中に教育班での実習が終了し、29日(土)から現場配属となり、それぞれが各工場で作業に当たることになりました。当初は、危険作業や熟練作業からは除かれていましたが、次第に一般工員と同様になりました、かつ一人前の戦力となっていました。



指導員の笛に合わせてハンマーを振り下ろす都立第三商業生(上)『アサヒグラフ』1944・昭和19年5月3日号より。右下の工具がキサゲ。

入寮

土浦中学45回生は入廠に先立ち、7月8日(土)、全員が烏山の工員養成所寮に入りました。寮の一室の大きさは8畳程で、部屋の両側に作り付けの2段ベッドがあり、片側4人宛で8人部屋になっていました。45回生たちが決められた部屋に入って、ズボンをたくしあげ、荷物の整理をしていると、蚤の大軍に襲われました。ふと気が付くと、足が真っ赤

になつています。よく見ると、小さな赤いものが這い上がつてきています。早速、用意されていた白い石灰の粉を多量に撒きましたが、撃退できず、撲滅手段は唯掃き出すだけ。寝具の毛布にまで入り込み、痒くて極度の睡眠不足に悩まされました。しかし、入寮して朝に夕に掃除を続けると、不思議な話ですが、数日で蚤は姿を消していました。

7月29日(土)には、麻生中学4年生約100名が、麻生港から水郷汽船のあやめ丸で土浦港に到着、航空廠のトラックで11時に入廠。身体検査・作業服の貸与後、班毎に宿舎に入り、土中生の各室に2名ずつ配属されてきました。

寮には角帽や丸帽の海軍依託学生(注)が数名居て、中隊長・小隊長として生徒たちの生活指導に当たっていました。上級学校への受験勉強に取り組む者もあり、技術将校や海軍依託学生が密かに指導してくれたこともありました【土浦中学の教師陣は夜の授業も考えたが、生徒が疲れ切っていたので実施を見送った】。

寮での生活は、起床から就寝まで、海軍生活そのものでした。朝5時、「総員起こし」で起床、寝具・蚊帳の整理、着替え・洗面の後、宿舎前に整列。隊列を組んで、グラウンドの朝礼場に駆け足で集合。朝礼は、軍艦旗掲揚から始まり、訓示の後、本日の指示・伝達事項となり、最後に海軍体操。体操が終わると、食事当番は駆け足で食堂に向かい、他の者は隊毎に駆け足で宿舎に戻り、部屋の掃除【特に廊下は、甲板かばん掃除と称して、腰を落として磨かされた】。掃除が済むと点呼で、室毎に廊下に整列し、甲板将校がやって来て点検。点呼後、また舎前に整列して、駆け足で食堂へ。食堂では当番が烹炊所から食器と食缶とを受け取り、配膳を済ませています。椀にはジャガイモの入ったご飯が漬物を添えて盛っており、それに味噌汁の入った汁椀とお菜さ

いの入った小鉢とが付いていました。全員が食卓に着くと、1分間の黙祷の後、「食事に掛かれ！」の号令で一斉に箸を付けますが、1〜2分であちこちから「馳走さま！」の声が掛かります。食事が済むと一旦宿舎に帰り、6時30分過ぎ、「庁舎前整列！」の号令で再び舎前に整列、駆け足で航空廠へ。タイムカードを押して7時5分前には入廠。各職場に到着すると全員整列し朝礼、宮城きゅうじよう遙拝、一空廠体操、「配置に就け、仕事に掛かれ！」で作業開始。11時30分昼食。弁当部で作られた弁当が寮生の昼食として各職場へ配られます。木製の弁当箱で中身はジャガイモやサツマイモの入ったご飯。おかずも貧弱なもので、忽ち食べ終わってしまい、当時、生徒たちはこれを「ゴジ弁(乞食弁当)」と呼んでいました。12時作業再開。3時30分終礼。4時10分カードを押して帰寮、入浴。5時30分夕食。夕食後は自習時間ですが、灯火管制が敷かれていたため、暗幕代わりの毛布で遮光した部屋で、思い思いに勉強しました。8時45分巡検

【陸軍では「消灯ラッパ」が一日の終わりだが、海軍では「巡検」と言った】。「巡検5分前！」の号令が掛かると、各員は、蚊帳を下ろしたベッドの中で目を瞑って、不動の姿勢で巡検を待ちます。巡検のラッパが鳴り、「巡検！」の号令で巡検士官がコツコツと靴を鳴らして、懐中電灯で各ベッドの中を照らして点検を行います。中には一日の疲れで軒を掻いて寝込んでしまふ者も居ましたが、咎められることはありません。巡検後、起きて勉強をしても良かったのですが、昼間の疲れでみんな直ぐに寝入ってしまいました。

休日(土)には教練査閱があり、午前は各工場、4・5年生の作業状況の査閱が査閱に代えて行われ、午後は学校で3年生以下の査閱が通常通り実施されました。なお、この査閱が土中では最後のものとなりました。

11月18日(土)には教練査閱があり、午前は各工場、4・5年生の作業状況の査閱が査閱に代えて行われ、午後は学校で3年生以下の査閱が通常通り実施されました。なお、この査閱が土中では最後のものとなりました。

退寮

寮生活をしてきた生徒たちの食事は次のようなものでした。

- 9月4日(月) 朝) 麦飯、茄子醬汁、茄子漬
- (昼) 馬麦飯【馬鈴薯と麦を主体とした「飯」、塩引【塩漬けの鮭】、キウリ【胡瓜】漬
- (夜) 馬麦飯、茄子醬汁、キウリ漬
- 10月2日(月) 朝) 麦飯、茄子汁、キウリ漬
- (昼) 馬麦飯、公魚ワカサギ、茄子漬
- (夜) 馬麦飯、うどん汁、キウリ漬
- 11月4日(土) 朝) 諸麦飯【薩摩芋と麦を主体とした「飯」、ネギ汁、菜
- (昼) 諸麦飯、大根、菜の煮付
- (夜) 諸麦飯、ウドン汁、菜漬

これは、麻生中学生に付き添っていた教師が書き残した1944年9月4日から翌年1月2日までの航空廠での献立の記録からの抜粋です【当時の逼迫した食糧事情を伝える貴重な資料である】。

食べ盛りの中学生にとっては、常に空腹を抱えての毎日となりました。更に食事は段々と悪くなつていって、入寮当初はご飯の中にジャガイモが入っていたのが、日増しに芋の量が増えていき、とうとうジャガイモの周りに「ご飯粒が付いているような状態になり、昼の弁当はダイコン飯になってしまいました。そのため、夜になると、塀を乗り越えて隣の

畑のサツマイモを盗んで来て、生の蕎麦を嚙る生徒も出てきました。空腹に耐え抜くこと、これは航空廠の生活で全ての生徒が経験した苦しみでした。

こうした状況の中にあつて、子どもたちの健康状態を心配していた父兄の有志が相談をして、学校長を通じて航空廠に通勤の許可を願い出ました。その結果、自宅からの通勤が認められ、生徒たちの寮生活は中止となりました。土中生は9月16日(土)に退寮し、18日(月)から自宅からの通勤が始まりました【土浦高女生は9月30日(土)に退寮、10月1日(日)から通勤を開始した】。しかし、麻生中学生をはじめとする、自宅が遠方で通勤が不可能な生徒たちは、1945年8月20日(月)の退寮式まで寮生活を続けました。

お国のためとは言いながら、育ち盛りの15〜16歳の少年少女が学業を擲ち、このような粗食に耐え、休日も殆ど無い苛酷な労働に従事したことを思うと、戦争の非情とともに平和の有り難さを感じみと感じます。

(注)海軍依託学生
海軍では、兵科・機関科・主計科については、それぞれ兵学校、機関学校・主計学校で士官を養成していたが、その他の分野では依託学生制度を設け、大学から人材を募っていた。依託学生には海軍から月額10円の学費と年間35円の被服費などが、学校を通じて支給された。卒業後は造兵(兵器担当)・造機(機関担当)・造船(艦船担当)などの各技術士官又は軍医の各中尉相当官に任官した。

※参考文献
「勤労動員学徒の日記抄」中45回 風間 雍
「学徒動員の回想」中45回 篠田 康
「勤労動員学徒の日記抄」
土浦高等女学校4年4組上野(佐々木)美代子
「工員寮の悲喜(こも)」中45回 狩谷孝雄
『戦いのなかの青春』所収・4編(とも)
『櫻水物語 戦中派の中学時代』
中48回・高1回 屋口正一